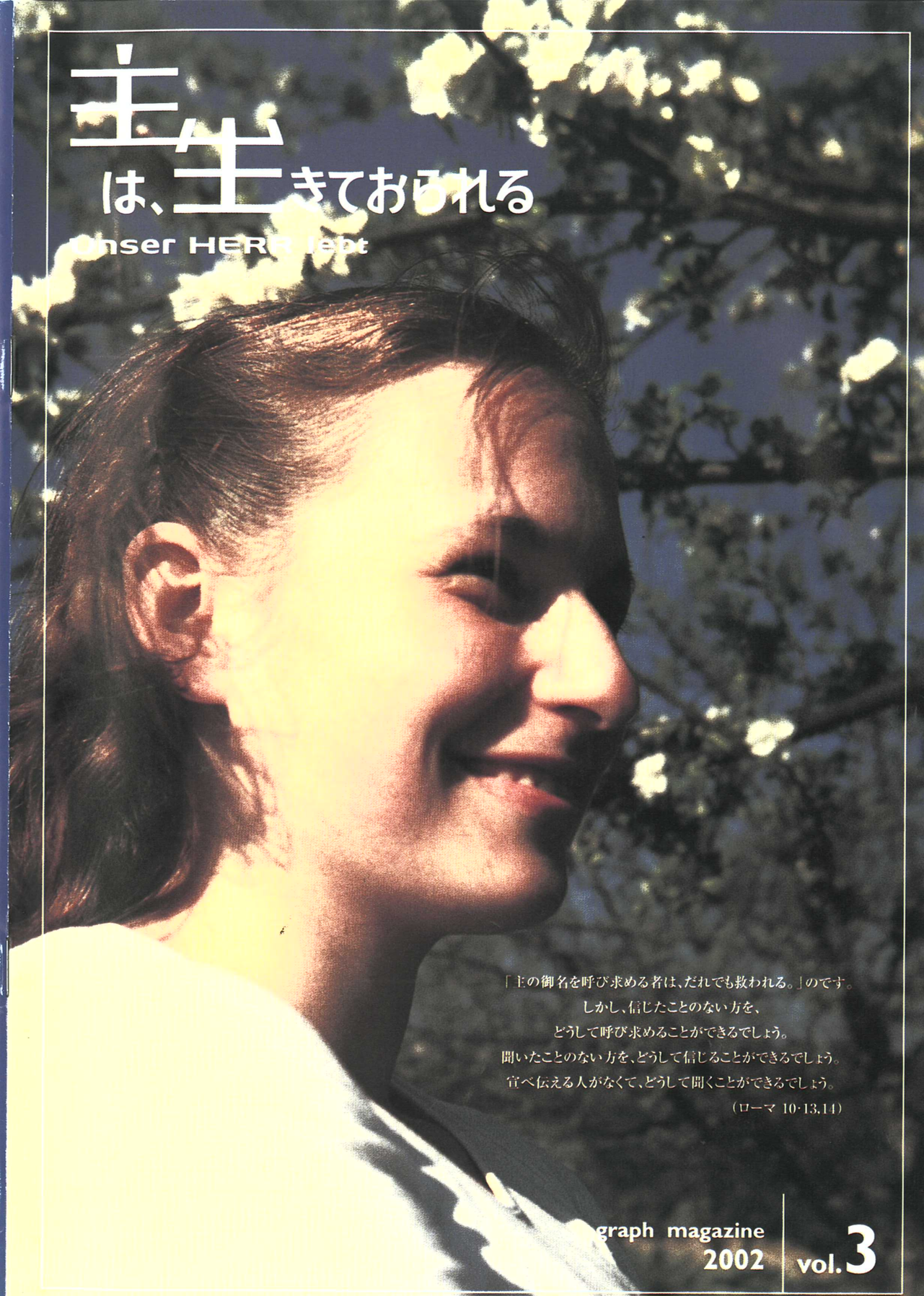
Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol.3

定価150円（本体143円）

主は、生きておられる

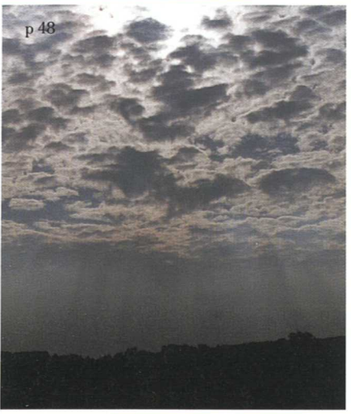
Unser HERR lebt



「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。
しかし、信じたことのない方を、
どうして呼び求めることができるでしょう。
聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。
宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。
（ローマ 10・13,14）

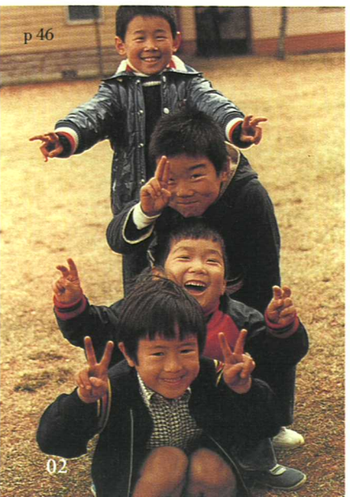
graph magazine 2002 vol.3











INDEX

巻頭メッセージ

04 飛べない鳥を見つめて

ゴットホルド・ベック

特集

06 キリスト集会で出版している本のご案内

連載メッセージ 第3回 ［モーセの十戒］

14 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

3人のメッセージ

20 イエス様の「謙遜」 松見敬三

24 イエス様による奇蹟 近森大志郎

26 がんばらなくても、いいんだよ 江田昌弘

28 2002年 7月～12月 ［メッセージ当番表］

2002年［よろこびの集いスケジュール最新版］

32 ドイツよろこびの集いで

青柳惇　奥淳治　奥裕子　恩田正徳 他

2人の証し［私たちは信じています］

38 御任克彦［とことん追い込まれて信仰へ］

40 北原雄司［イエス様の恵みに感謝します］

42 再臨をテーマにした米映画

［バニッシュド］のメッセージのご紹介

45 各地の集会から

こちら福岡集会で～す

46 子どもたちとの触れ合いから

あおぞらひろば

48 五旬節

その日、聖霊が下ってきた！

50 ケーキの会へどうぞ

52 結婚・葬儀の報告

53 キリスト集会へのご案内

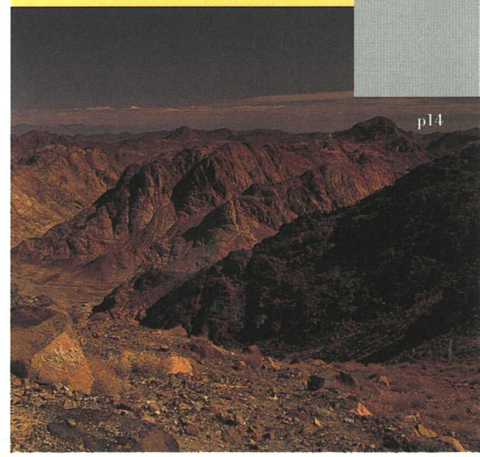
54 全国の集会住所録

表紙 「実を結ぶ命」のリンデさん



Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol.3











飛べない鳥を見つめて

ゴットホルド・ベック

1996年の「ドイツよろこびの集い」でのことです。私は170人の日本人参加者と一緒に、生まれ故郷のシュトゥットガルトの街へ行きました。そのときヴィルヘルマという小さな動物植物園に入ったのですが、一羽の惨めな鳥が私の目に留まりました。おそらくだれも気づかなかったでしょう。その鳥は外国から運ばれてきて、馴れない環境の中でおかしくなってしまったようでした。立派な羽を持ち、普通なら飛べるはずなのに、もうどうにもならなくなっていたのです。

写真に撮る価値などない鳥かもしれませんが、私はカメラを向けました。この鳥のことを記憶にとどめたいと思ったからです。こうしてその鳥の写真は私の机の上に置かれ、いつも見るものとなりました。私はよく枝葉のことを大切にし、一番大切なことをいつの間にか忘れてしまう、そういう者である、という自戒の気持ちがそうさせたのだと思います。

いわゆる“良いもの”は、最もいいものの敵である、ということをいつも心に留めるべきです。

私は主イエスに頼るために救われ、また祈りを通して主と共に働くべき者です。しかし現実の私はどうでしょう。私は上に述べたような者ではないか。羽はあるのにあまり使っていないのではないか。自分を無視して主だけに頼ればいいのに、忙しさのあまり、最も大切なこと、すなわち主イエスの前に静まること、主に心から尋ね求めることが少な過ぎるのではないか、と自問することがあります。日々、次のように祈っていきたい、と思っています。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。（詩篇　139･23、24）

最近、多くの人が「日々の光」という本を読んでおられるということは、本当にすばらしいことです。全国の集会の方々が同じみことばを読み、読みながら祈り、また祈りながら読んでいると思うと、うれしくなります。なぜなら、祝福されることは確実だからです。主の再臨まで、みことばを祈りの材料として使いましょう!

私はいつも自分自身に問いかけます。数えられないほど多くの、救い主イエスを知らない人々は、私にとって重荷なのか、と。主イエスの心構えが私にできているのか、と。

かつてモーセは次のように祈らざるを得ませんでした。

今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら―。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。（出エジプト　32･32）

パウロも叫ばざるを得なかったのです。

もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。（ローマ　9･3）

エペソ人への手紙の中で、パウロは当時の信徒たちに、このように告げています。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。（エペソ　6･12）

私たちは、この闘いの恐ろしさ、また悪魔の憎しみを感じているのでしょうか。

聖霊に導かれてパウロは主のみことばを伝えたのです。

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ　6･18）

最後に、ある知恵遅れの子の話をしましょう。その子は、いつもいじめられ、「何もできない」、「全く役に立たない」とバカにされ、同級生から完全に無視されていました。親にとっても、重荷であり、悩みのタネであったでしょう。

そんな状況の中で、あるとき、先生がクラスの全員にそれぞれ自分の考えていることを話すように、と言いました。子どもたちは次々にいろいろなことを話していきましたが、知恵遅れの子の番になると、ほかの子どもたちは口々に「無理だよ」「あの子は何もできないよ」と言い張りました。でも先生は「静かにしなさい。もしかすると一言くらい話すかもしれないから」とたしなめ、じっと待ちました。すると、しばらくして知恵遅れの子は口を開き、5分間かかって短い文章をしゃべったのです。

知恵遅れとして生まれたその子の中には、自分の運命を訴える気持ちがありませんでしたし、自分をずっといじめ、無視してきた同級生への恨みや怒りもありませんでした。

話した文章は「ぼく、イエス様大好き。イエス様もぼくを大好き」でした。

それを聞いた同級生たちはびっくりして、泣きながら「悪かった」「悪かった」と言って知恵遅れの子のところへ駆け寄り、握手をしたのです。



新約聖書を見ると、イエス様は多くの個所で「福音を伝えよう。」また「福音を伝えなさい。」と言われています。そのうちの一つは、「福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。」(マルコ 13·10)であり、またその少し先でイエス様は「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16·15)と言っておられます。「福音を宣べ伝える」ことは、イエス様のみこころであり、強いご意志なのです。では、福音とは何を指すのでしょうか。福音の最も大切な核心は、「イエス様が人々を救うためにこの世に人の姿となって下られたこと。十字架について血を流して、私たちの罪を贖われ、救われたこと。よみがえって天の御国に上り、今も私たちを愛し、働いてくださっておられること。やがて再びこの地上に下られ、私たちは天に引き上げられ、再臨が来ること。」です。私たちは、イエス様を受け入れ、信じたときから、「イエス様のすばらしさ、イエス様の福音」を一人でも多くの方々にお伝えしたいという、止むに止まれぬ思いを与えられます。旧約時代の預言者エレミヤは、主の意志を伝えたいという強い思いについて、次のように証ししています。「主のみことばは私の心のうちで……燃えさかる火のようになり、私のうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。」(エレミヤ 20·9)。

世の中の多くの方々が、まだイエス様の救いのことを知らずに、死と永遠の滅びの道をたどっておられることを見る者は、その救いについて大きな責任を感じないではいられなくなります。「こんなにすばらしいイエス様、こんなにすばらしい救いの世界があるのだから、イエス様のもとにいらっしゃい」と勧めないではいられなくなります。そして、勧める人がいなくて、どうして福音が伝わることができましょうか。

キリスト集会では、「イエス様のすばらしさをお伝えし、福音をお伝えする」ために、多くのことが行なわれています。ある意味では、集会の活動のすべては、イエス様のすばらしさをお伝えし、証しするためだ、と言えるでしょう。礼拝の後の福音伝道集会、メッセージ、学び会、祈り会、家庭集会、よろこびの集い、洗礼式、多くの人々の証し、賛美。国際センターの働きや、メサイアの演奏会もそうです。これらによって伝えられた「イエス様のすばらしさ」は、日本各地に止まらず、世界へと広がっていきます。それは主のご意志だからです。そして結婚式や葬儀も、イエス様を中心に、福音をお伝えするよい機会として主に用いられます。また一方で、キリスト集会では多くの出版物が刊行されていますが、これもまた、「イエス様の福音を宣べ伝える」ための活動であり、その中心にはイエス様だけがおられます。「すべての本は、イエス様のご本」です。イエス様のご意志が、本の形になって、そのみこころを広めていかれるのです。



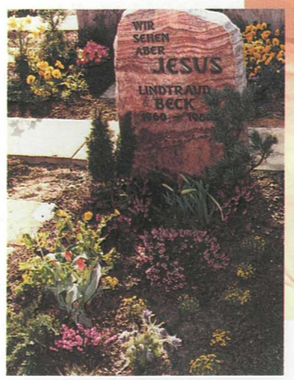
1971年11月 特別伝道集会にて

主は集会の本を通して、強く働かれる。

キリスト集会では、たくさんの本が出版されています。これらの本はすべて、主が計画し、私たちに働きかけて、お作りになったものです。今は主の恵みの時、福音が伝えられるべき時です。もちろん、みことばは口で語られることが大切ですが、限られた時間に、いろいろなことをお伝えすることはできないし、また、主のことを語る勇気がなくて機会を失うことも多いのです。その点、印刷された本は、多くのことが書かれていて、祈って渡しますと、いつの時にか読まれて、そこで主が強く働かれます。もらった方がゴミ箱に捨てた「光よあれ」を拾って読んで、救われた方もいらっしゃいます。自分でしゃべれなくても、主の本が語ってくれるのです。ですから、いつも祈って、一人でも多くの方々に、主のご本を配りましょう。以下に、キリスト集会で出している出版物を、誕生のいきさつも交えてご紹介します。



病床のリンデさん



"Wir Sehen Aber Jesus"
(しかし私たちは主を見る)と
刻まれたリンデさんの墓



ベックさんご一家
左から2人目が
リンデさん

1980

すべては1冊の本、「実を結ぶ命」から始まった



ゴットホルド・ベック著
「実を結ぶ命」(価格330円)
日本語版



ドイツ語版



英語版



イタリヤ語版



ポーランド語版



ハンガリー語版



ロシヤ語版



韓国語版

主が私たちに最初にくださったのは、「実を結ぶ命」です。1980年当時、キリスト集会の前身である吉祥寺キリスト集会は、まだ100人足らずの集りでした。そのころ、ベックさんの4女リンデさんが、がんで召されました。ベックさんがリンデさんのことを書いた本を出そうとしておられるのを知って、集会の多くの方々は首をかしげました。自分の娘の追悼のために本を出すなんて、と思ったのです。じつはそうではありませんでした。ベックさんの真意は、本を通して、「イエス様に従う者はどのように死に直面し、死を乗り越えて天の御国に召されていくか」を証しすること、また、病のいやしを主に強要したり異言で叫んだりする「いやし、異言の教会」の危険について強く警告し、「いわゆる宗教」ではない「真の信仰、真の救い」を一人でも多くの人々に知ってほしい、イエス様のもとに来てほしい、というところにあったのです。もちろん費用は自費による出版です。最初は首をかしげていたある方は、ベックさんの真意を聞いてこう言いました。「わかりました。手伝いましょう。ベックさん、全財産をお出しなさい。本が出て、たった一人でもすくわれたら安いものではないですか」。こうしてできたのが、「実を結ぶ命」です。内容は、リンデの生涯、リンデの学び、宗教から救いへ、の3部からなっています。特に、生と死の問題に直面しておられる方にぜひ読んでいただきたい本です。この本が出ると、「たった一人」どころか、多くの方々がイエス様に救われました。世界的に有名な数学教授も、強度のアルコール依存症の方も。リンデが学んでいた看護学校のあるドイツのムッターハウスを、おおぜいの日本の集会の方々が後に訪問した時、本を手伝った方が壇上からドイツの方々に言いました。「みなさん、今日、200人のリンデがドイツに帰って来ました」と。その後、この本は主に大いに用いられ、200人どころか、今では数千人の方々を主のもとに導いています。日本語版は重版を重ね、また独、英、伊、ハンガリー、ポーランド、ロシヤ、中、韓、さらに現在進行中のナイジェリアを含め、10カ国語に翻訳され、現在発行部数は30万部を越え、世界中で主に用いられています。



第1集
数学者、カメラマン、
会社員ほかの証し。
25人　330円



第2集
アルコール依存症、
娘さんを召された医学者など。
25人　350円



第3集
教育者、
コンサルタントほかの証し。
42人　330円



第4集
がんの問題を中心に。
夫婦の証し。
66人　350円



第5集
ノイローゼ、透析、
ほか京都、沖縄の方など。
67人　380円



第6集
筋萎縮症、自殺、
がんなど。夫婦の証し。
70人　380円



第7集
大学教授、一般家庭、
筋萎縮症ほか。家族の証し。
69人　400円



第8集
がん、天の御国、
永遠のいのちほか。
家族の証し。
88人　400円



第9集
海外居住者ほか。
家族の証し。
144人　400円

1982 - 1998

主が次にくださったのは、証し集の「光よあれ」

主が次にくださったのは、イエス様のもとに導かれた多くの方々の証し集、「光よあれ」です。私たちの人生において、イエス様の救いを体験的に知ることは、とても大切です。ここでいう「体験的に知ること」とは、何もイエス様についての知識や聖書の知識を得ることではなく、「イエス様ご自身を、知ること」です。そしてイエス様ご自身を知ることは、ただ上からの光によってのみ、また主ご自身の啓示によってのみ、私たちに与えられるのです。この本の第1集が発行された1982年当時は100人足らずだった吉祥寺キリスト集会は、「実を結ぶ命」出版をきっかけにして多くの方々がイエス様に出会い、救われるようになりましたが、その人々がイエス様を「体験的に知る」ようになったいきさつを、それぞれの立場で語られたのが「私たちは主のもの 光よあれ」です。「光よあれ」のシリーズは、その後の約20年間に、第1集から9集までがほぼ1年おきに発行され、合計実に596人の人々が証しをされています。発行部数は合計50万部以上に達し、全国から、全世界から購読申しこみが寄せられ、1冊1冊祈りをこめて発送されていきます。以下、各集の特徴を記しておきます。

第1集は25人の人々が証しをされています。数学の教授、アルコール依存症から立ちなおった方の奥さん、商社マン、映画のカメラマン、女性歯科医などの方々が、「私はどうしてイエス様を知り、信じたか。またその結果、人生がどのようにすばらしいものに変わったか」を率直に語っておられます。証しをする方々は、地位や経歴が偉いからではなく、また、集会に長くいるからではなく、「たまたま主が救われた代表的なケースのサンプル」として登場しているにすぎません。つまり、主のご栄光を表わすための証し人であれば、誰でもよく、個人の名前、経歴などはまったく意味がありません。このシリーズは、ベックさんのメッセージ集と交互に、2年に一回のペースで刊行され、すでに20年がたっていますが、証しの内容は古くなるどころか、ますます現代の乱れた世に強く響いてきます。救いと人生の真実は、どのような時代にあっても、少しも古びることはありません。

この「光よあれ」は、2、3集目あたりから、少しずつ、救われる方々の代表的なケースに、テーマを持つように編集されるようになりました。たとえば、第2集の証し人は25人で、会社勤めのケース、アルコール依存症のケース、不慮の事故で子供を召されたケースなどがテーマです。いずれのケースも、決して人が中心ではなく、イエス様が中心になっています。

第3集目では証し人が42人に増え、ご夫婦の両方の立場からの証しも増え、一つの救いのケースをご夫婦の両サイドから立体的に見ることができます。そこに現われてくるのは、人が何かをしたのではなく、ただ主の愛とご栄光です。この集は、ビジネス・コンサルタント、教育者、また会社勤めの方々がとりあげられています。

第4集からは、救われる人が増えたこともあり、証し人の数も66人と一挙に増えて、本が分厚くなります。この集のテーマは、「がん」です。有名なニュースキャスターを始め、イエス様を信じて平安に天に召されていった方々が率直ですばらしい証しをしておられます。重い病の床にある方々にぜひ読んでいただきたい1冊です。主が生きておられ、私たちを愛し、その御手を働かせてどれだけすばらしいことをなさるかが、すべての証しにあふれています。

第5集は引き続きがんと、ノイローゼの特集です。銀行員、小説家志望だった方など、切実な証しにあふれています。

第6集は、筋萎縮性側索硬化症ほか、いろいろなケースの証しが集められています。

第7集は69人、第8集は88人、第9集は実に144人と、さらに証し人が増え、あらゆるケースにわたって、「私はいかにしてイエス様を信じたか。その結果人生はどのようにすばらしいものに変わったか」が率直に書かれています。これらの「光よあれ」は、総出版部数は50万部を越え、広く読まれ、多くの方々をイエス様のみもとに導くために主によって用いられています。まだお読みになっておられない方は、ぜひ、身近なテーマの集から手にとってみてください。

ローマ人への手紙「なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない」

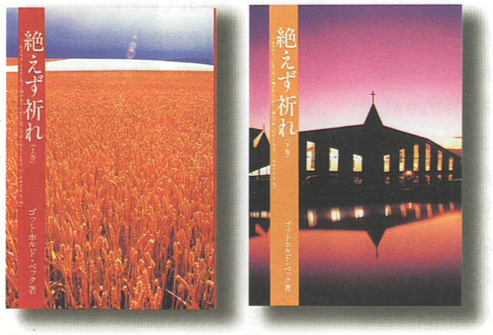


ゴットホルド・ベック著
ローマ人への手紙「なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない」価格上下巻とも300円

キリスト集会では、火曜日に学び会があって、ベックさんが大きなテーマで連続メッセージをしておられます。「実を結ぶ命」に続いて出たメッセージ集は、「神の愛」（略称）で、1986年に上巻が、1989年に下巻が出版されました。「ローマ人への手紙」は、新約の書簡集で最初に出てくるものであり、パウロが初めてイエス様の十字架の血による救いの意味を明らかにし、信仰の真髄を説き明かした重要な書簡です。この本は、「ローマ人への手紙」の章を追って説かれていますが、注釈書や解説書ではなく、「ローマ人への手紙」を通してイエス様をもっとよく知ろうとする方々へのやさしい語りかけになっています。内容は「全人類の救いの必要性」「提供された主の救い」「新しい生活の歩み」（上巻）「神の義と人の義の戦い」「神と人を愛せよ」（下巻）からなっています。

「ローマ人への手紙」こそは聖書全体のエッセンスであり、その栄光と恵みに満ちた福音があますところなく語られています。この本は、聖書を研究するためにではなく、日々の生活の中でさらに深く主のみことばを味わいたいと思っておられるかたがたのためにすばらしい恵みとなることでしょう。なお、下巻の巻末の「あとがき」には、「いわゆる宗教としての組織された教会」ではなく、「真の信仰に基づく、主のみからだとしてのキリスト集会」について、ベックさんが細部にわたって明快に述べておられます。キリスト集会を知るためには不可欠のメッセージです。

熱い祈りを集会にもたらした「絶えず祈れ」



ゴットホルド・ベック著
「絶えず祈れ」（上巻400円・下巻250円）

イエス様を信じ従う信仰で、最も大切で重要なのは「祈り」です。1992年に上巻、1994年に下巻が出た「絶えず祈れ」は、「神の愛」と同じくベックさんの火曜日の学び会でのメッセージをまとめたもので、「真の祈りとは何か」、「いつ、どのように祈ればよいか」、「それは主によってどのように聞かれ、答えられるか」、「正しい祈りと間違った祈り」、「日常生活での祈りの力」などが、わかりやすい言葉と聖書の引用によって説き明かされています。主は、この「絶えず祈れ」によって、キリスト集会をまことの熱い祈りにあふれる集会へと作りかえられました。それまで、「祈り」については正しく理解する人々が少なく、至らない祈りや間違った祈りが多く、祈りの大切さは忘れ去られていました。この本によって、「祈り」は、本来あるべき生き生きとした、生活の瞬間瞬間に生きて働く主との交わり、会話、交流としてキリスト集会の隅々に働くようになりました。この本は集会の方々だけでなく、一人でも多くのまだイエス様のことをご存知ない方々、そしてすでにイエス様を信じていらっしゃる方々に、ぜひ読んでいただきたい本です。「祈り」の真髄が、身近な体験として、わかるようになります。なお、この本は、小学校高学年でも読めるように、かなを多くし、文章は平易になっています。また、上巻末には、この年に完成した西軽井沢福音センターの模様がカラー写真で紹介されているのも、今となってはいい思い出です。

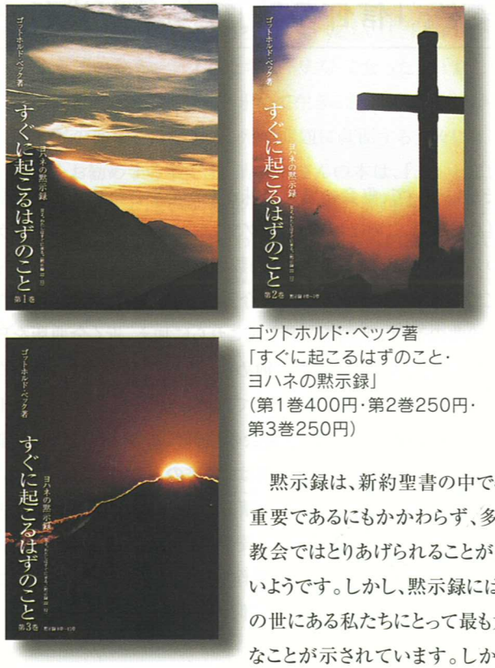
祈りに対する主のお答え。集会の訪独記念グラフ「日本・ドイツの出会い」



訪独記念グラフ
「日本・ドイツの出会い」（300円）

1994年、キリスト集会の方々200人が、「40年以上も日本のために祈り続けてくださっていたドイツの兄弟姉妹」と会うために、ドイツのアイドリンゲン・ムッターハウスほかを訪れました。ドイツの兄弟姉妹が祈って支えてくださっている日本のキリスト集会を通して、聖書に基づく真の信仰が日本に広がっていることは、「祈り」に対する主の大きなお答えです。ドイツでは言葉はうまく通じませんから、聖歌を歌ったり、ヘンデルのメサイアから4曲を演奏して、各地を証しして回りました。そのときの写真アルバムが、この「ドイツ・日本の出会い」という写真証し集です。本の正確なタイトルは、「40年間日本のために祈り続けたドイツの主にある兄弟姉妹との出会い・1994ドイツよろこびの集いの記録」です。国境を越えて共に主にあって喜びに輝く多くの方々の写真と、参加した全員が書いている短い証し、また、ベックさんご自身の証し、ムッターハウスやディアコニセの方々の紹介、演奏会の模様など、キリスト集会のドイツとの深いつながりがよくわかるアルバムです。キリスト集会の、喜びにあふれた雰囲気を知っていただくためにも、ぜひご覧いただきたい1冊です。巻末には、1995年1月に起こった阪神大震災に遭われた関西の兄弟姉妹の証しと記録が収められています。

終わりの世への主の啓示。「すぐに起こるはずのこと・ヨハネの黙示録」

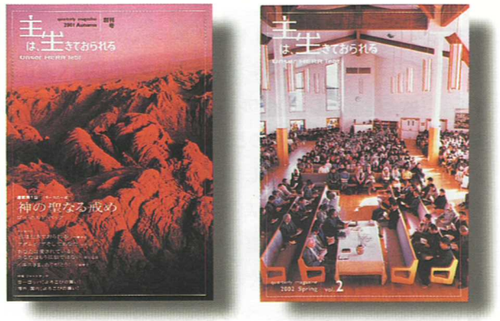


ゴットホルド・ベック著
「すぐに起こるはずのこと・
ヨハネの黙示録」
（第1巻400円・第2巻250円・
第3巻250円）

黙示録は、新約聖書の中で特に重要であるにもかかわらず、多くの教会ではとりあげられることが少ないようです。しかし、黙示録には、末の世にある私たちにとって最も大事なことが示されています。しかもそれは、「すぐに起こるはずのこと」です。末の世の特徴、空中携挙に始まる再臨、それに続く主の厳しいさばき、来るべき終末、そして究極の主の御国の栄光と至福の姿が、これほどはっきりと啓示されている所は他にありません。この「すぐに起こるはずのこと・ヨハネの黙示録」は、ベックさんが火曜日の学び会で1年半にわたって行なわれたメッセージを集大成したもので、現在黙示録の15章、3巻までが刊行されています。引き続き16章から終わりまでの第4巻が出版準備中です。

この本は、決して単なる解説書や研究書ではありません。黙示録に書かれていることを、現代の私たちにもよく分かるように読み解きながら、私たちの日々の信仰の霊的な糧となるように書かれています。全体は、ヨハネが受けた啓示から始まり、七つの教会への手紙、封印の開封、ラッパのさばき…と章を追って詳しく解き明かされていきます。テロ、戦争、環境の悪化、カリスマの出現など、現代の世界に見られる、ただならぬ気配、予兆は、すべて黙示録に預言されていると言ってよく、再臨を待ち望む私たちにとっては、どうしても知っておかなければならないことばかりです。終末が日々近づくおりから、ぜひ深く読み込んでいただきたい、必読の書です。

「主は生きておられる」21世紀から発刊されたキリスト集会のグラフ誌



キリスト集会グラフ誌「主は生きておられる」
（バックナンバー・第1巻、第2巻ともに150円）

再臨が近く、残された恵みの時が刻々と過ぎゆく中で、キリスト集会の出版物も、従来の年1冊のスピードでは間に会わなくなって来ました。日々流動する世界の情勢、私たちの周囲の状況の変化に速やかに対応し、あらゆるニュースをできるだけ早く皆様のもとにお届けするために、集会の出版物の中にグラフ誌を加えて発行することになりました。この方法は主に示されたもので、現在3号までが発行されています。グラフ誌のタイトルは「主は生きておられる」で、主が生きて働いておられることを、生き生きと未信者のみなさまにお伝えすることを目的にしています。また、キリスト集会の中のいろいろなニュースや予定なども豊富に盛り込まれています。内容は、信者、未信者、病気の方、子供さんのためのメッセージ、ベックさんの「モーセの十戒」、たくさんの方々の証し、集会やよろこびの集いの予定、各地の集会のニュース、ドイツの方の原稿など多岐にわたっています。この雑誌が今後どのような形に発展していくかは、ただ主のみがご存知です。「主は生きておられる」ことが実証され、主が働かれる御手が実感でき、聖書のすばらしさと主のご真実が体験できるグラフ誌として、ぜひご愛読ください。

主が喜ばれる新しい賛美の曲集を。「信仰の歌」の編纂が進行中



「信仰の歌」とCD
（ドイツのグラウベンスリーダー、ノイエリーダーから）
暫定版・非売品

キリスト集会の礼拝や集会での賛美は、従来「聖歌」を用いてきました。しかし聖歌は絶版になって入手できなくなりますし、また聖歌の歌詞は文語文で、若い人々には意味がわからない所が多く、また、私たちキリスト集会の信仰とは必ずしも一致しない表現もあることから、キリスト集会独自の、聖書の事実のみに基づいた賛美の曲集が望まれていました。

それについて、集会の兄弟姉妹がたが心を合わせて編纂に取り組んだ結果、このほど、ドイツのグラウベンスリーダー、アイドリンゲンのノイエリーダーからまず約100数曲を選び、日本語の歌詞を付けて暫定版として出版しました。今後、さらに私たちが歌い慣れた約200曲の楽譜、歌詞を一新してこれらに加え、近く全曲版を刊行する予定です。この曲集に納められた曲の歌詞改定は、少ない音符に音節の多い日本語を当てはめるので、原曲の全訳は不可能です。したがってキリスト集会の信仰に基づくオリジナルの歌詞に改めています。すべての曲は、聖書のみことばだけに立ち、信仰の上で最も大切な十字架、贖罪、救い、よみがえり、昇天、再臨を中心に、主への感謝、祈り、賛美を歌い上げています。また、暫定版の100数曲まではCDも制作されています。キリスト集会では礼拝の賛美はほとんどこの「信仰の歌」から歌われるようになってきています。

毎年賛美されるヘンデル「メサイア」のCDも



ヘンデル「メサイヤ」全曲版CD
（CD2枚セット200円、
5セットが1パックで1,000円）

キリスト集会では、毎年集会の方々による独唱、管弦楽、コーラスで「ヘンデルのメサイア」を東京や埼玉、九州などの大ホールで演奏、賛美していますが、この演奏がCDとなって発売されています。全曲がCD2枚1セットで200円。これが5セット分きれいな1パックに収まって1000円です。救世主イエス様が地上に来られ、十字架について私たちの罪を赦し、救われた、その貴いみわざと永遠の栄光が高らかに歌い上げられています。ぜひお聞きください。

キリスト集会の方々の著作も取り次いでいます

キリスト集会では、福音を伝えるためにご自身で本を書き、また出版社から出しておられる方々もあります。イエス様のすばらしさを伝え、救われた喜びを証しし、専門分野ならではの体験から生まれたまことの信仰がわかりやすく説かれています。東海大医学部の名誉教授である重田定義さんの著作は、お嬢様が天に召されたことを通して福音の真髄を伝える「私達の国籍は天にあります」をはじめ、医学と信仰の問題をテーマにした「医者に治せない病気」、福音のみことばを伝える「みことばは食べるもの」、「仮の住まいと永遠の住まい」、「私たちはキリストに会った」、「新しい天地と古い天地」、「何を求めて生きるか」などがあり、特に病気の問題を持つ方々、死の問題に直面する方々には一読をお勧めする本です。青柳惇さんの本は、「若い日に創造主を覚えよ」という、集会で行なわれたメッセージ集で、16のメッセージが集められ、わかりやすく主の福音が説かれています。ぜひお読みください。

重田定義著

「私達の国籍は天にあります」（600円）

「医者に治せない病気」（450円）

「みことばは食べるもの」（300円）

「仮の住まいと永遠の住まい」（300円）

「私たちはキリストに会った」（一粒社・700円）

「新しい天地と古い天地」（300円）

「何を求めて生きるか」（300円）

青柳惇著

「若い日に創造者を覚えよ」（技術経済研究所・500円）

購読のお申し込みは

はがきに本やCDの題名、巻名、数、氏名、郵便番号、住所、電話番号をご記入の上、
180−0004武蔵野市吉祥寺本町4−9−11吉祥寺キリスト集会まで。
代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込み用紙でお振込みください。お待ちしています。

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

「モーセの十戒」3

1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
7 あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10 しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。―あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。―
11 それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13 殺してはならない。
14 姦淫してはならない。
15 盗んではならない。
16 あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」（出エジプト 20・1～17）

私たちはこれまで律法の意味について考えてきましたが、それは「未信者に対する」律法の意味についてでした。今回からは、「信者に対する」律法の意味をご一緒に考えていきましょう。ポイントは4つです。

1 神の賜物として与えられる義
2 神の戒めを喜ぶキリスト者
3 十戒を守ろうとするキリスト者の敗北
4 御霊の実としてのみこころの実行

1 神の賜物として与えられる義

主イエス様だけが、律法を完全に満たされました。私たちはまず、この地上における主イエス様の歩みをたどって、モーセの十戒と照らし合わせ、その尺度でイエス様のなさったことを見てみましょう。イエス様の言葉、行動、考え、感情、その他すべてのことを調べても、そこには一つの罪の影すら見出すことはできません。主イエス様は、ご自分の敵に向かって次のように言うことがおできになりました。

「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。」
（ヨハネ 8・46）

誰一人として主イエス様を責めることのできる人はいません。近づきがたい聖なる光の中に住みたもう主ご自身、主イエス様の中にひとかけらの罪も見い出されないで、反対に「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」（マタイ3・17）と言われたのです。

イエス・キリストご自身こそが神の義そのものです。イエス様は私たちの罪と債務をご自分の身に受けてくださり、十字架の上で罰せられ、救いの道を開いてくださいました。イエス様は、流された血潮という尊い代価を支払って、私たちを贖ってくださいました。ですから私たちはイエス様のものなのです。そして私たちは、イエス様を受け入れることによって、イエス様の持っておられるものをいただくことができるのです。つまり私たちは、イエス様の義をいただくことが許されるのですから、主が私たちをご覧になるときには、いつも「イエス様のうちにある私たち」をご覧になるのです。そして私たちのうちに住んでおられるイエス様だけが、モーセの十戒の唯一の実行者なのです。

イエス様を通して、私たちは義と認められるようになり、イエス様の義を持つ者となりました。イエス様の義は永遠に常に変わることはありませんから、私たちの持っている義もまた、とこしえに変わることがありません。私たちはみなイエス様に従っていても罪を犯す可能性がありますが、与えられたイエス様の義は決して汚されることはありません。たとえどのような罪や問題があったとしても、私たちに与えられたイエス様の義はとこしえに変わることなくはなく完全です。ですから私たちもイエス様にあって完全な者とされているのです。

そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。（コロサイ 2・10）

イエス様が私たち人間の罪のためにどれほど苦しまれたかを知る者は、安易に罪を犯したり、敗北のあとに平気な気持でいたりすることはできません。ですからもし罪を犯したならば、そのときには大きな痛みを持ってイエス様のみもとに行き、新たにイエス様の義を喜ぶ者とされる恵みをいただくことができます。私たちが主の前に立つときを考えると、イエス様によってモーセの十戒がすでに完全に満たされているということは、何という大きな慰めでしょうか。

私たち自身はまことに不完全で、裸で、みじめな者ですが、イエス様のうちにある私たちは主の前に非難されることがなく、主に受け入れられる者とされているのです。言うまでもなく、私たちは自分の努力や手柄によっては、主の前に決して義とは認められません。しかしイエス様が与えてくださった義によって、私たちはいつも完全な者とみなされるのです。

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。（ローマ 8・33、34）

2 神の戒めを喜ぶキリスト者

イエス様はただ単に私たちのために身代わりとなって十字架上で死んでくださったというだけではなく、それによって私たちのうちに何か新しいものが生じたのです。私たちのもっとも深いところで、新しい変化が生じました。私たちはイエス様とともに葬られ、よみがえったのです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。 **(ローマ 6･6)**

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。 **(ローマ 6･4)**

「私たちの古い人」つまり生まれながらの性質は神の戒めを喜びません。なぜなら「私たちの古い人」にとっては戒めは嫌でたまらない強制そのものであり、何とかしてそれから逃げたいと思うような者でしかないからです。しかしこのような古い性質は、イエス様の十字架の死によってその力を奪われました。そして今や、まったく新しい者として、イエス様のいのちが与えられたのです。

イエス様の人生における最大の喜びは、父なる神のみこころを行なうことでした。

イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」 **(ヨハネ 4･34)**

すなわち、主イエス様のいのちは神の律法を喜ぶものです。

すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、･･･(ローマ 7･22)

回心を経験した者は、ローマ人への手紙の7章12節の「律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」ということを認めます。ですから、モーセの十戒は信者にとってまったく新しい意味を持っています。信者は律法を、主の聖なるみこころとして認め、主を愛するがゆえに、主の律法と命令をもこよなく愛します。

主の律法との関係は律法をお与えになった主との関係を整えることによって、まったく新しいものとなります。人は主を父と呼んでいながら主の律法を無視することはできません。主の戒めは、主のみこころそのものの表われです。

「この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。そのうちにしるされているすべてのことを守り行なうためである。そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。」 **(ヨシュア 1･8)**

詩篇119篇のみことばを読むときに、イエス様が主の律法に対していかに深い愛を示されたか、そしてまたイエス様の人生の秘訣がどこにあったかを知ることができます。そしてまた、この詩篇の作者も、私たちも、イエス様と同じような性質をいただいていることがわかります。

私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。(詩篇 119･16)

私のたましいは、いつもあなたのさばきを慕い、砕かれています。(詩篇 119･20)

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。 **(詩篇 119･72)**

あなたの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。それはとこしえに、私のものだからです。 **(詩篇 119･98)**

私は、あなたのさとしを永遠のゆずりとして受け継ぎました。これこそ、私の心の喜びです。 **(詩篇 119･111)**

私は、わが神の仰せを守る。 **(詩篇 119･115)**

それゆえ、私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。(詩篇 119･127)

私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。 **(詩篇 119･131)**

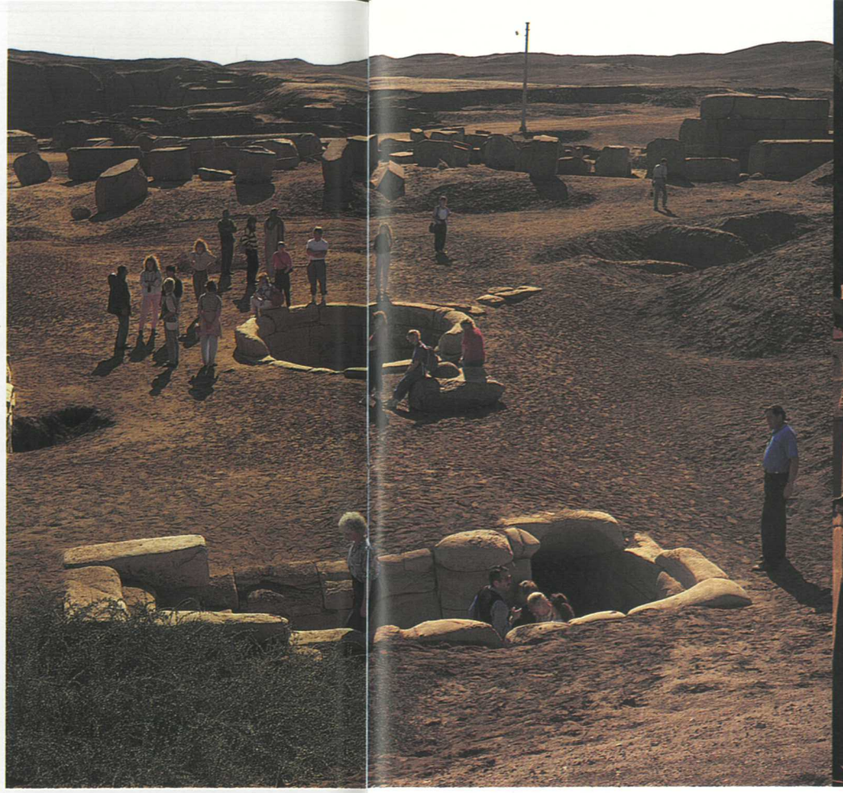
あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。 **(詩篇 119･140)**

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。 **(詩篇 119･162)**

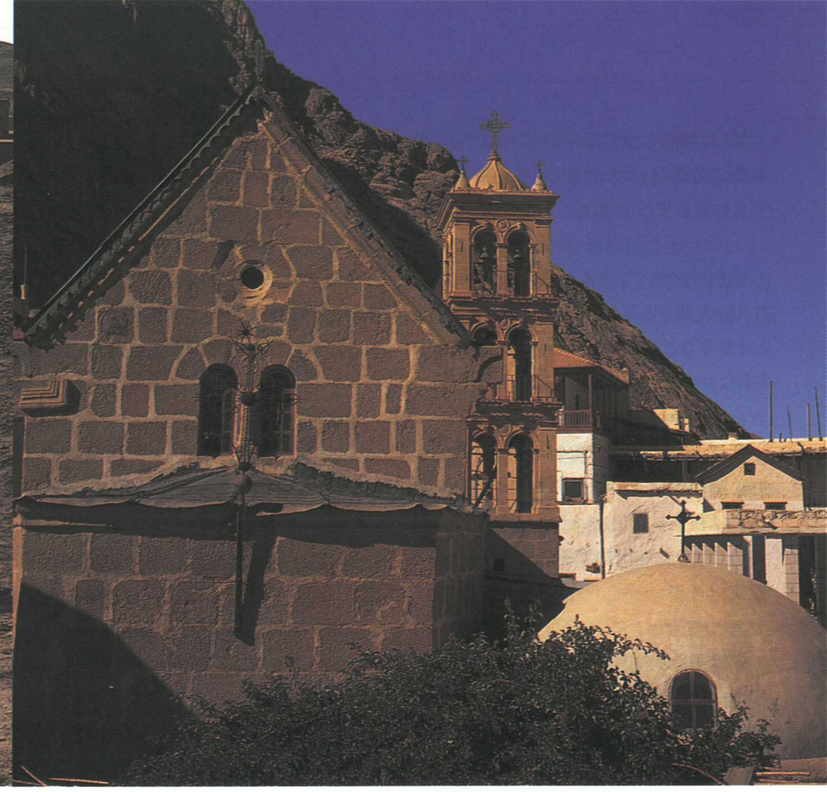
あなたの義のさばきのために、私は日に七度、あなたをほめたたえます。 **(詩篇 119･164)**

私はあなたの救いを慕っています。主よ。あなたのみおしえは私の喜びです。 **(詩篇 119･174)**

このようなみことばは、私たちの心に深く響いてくるでしょうか。それともまったく無関心でいられるでしょうか。



ヨセフの掘った井戸



「カタリーネンクロースタ」の中にあるモーセの芝

私たちが改めてモーセの十戒を読むとき、それはもはや奴隷に対する主人の冷たい鞭ではなく、私たちのきよめと栄光を望む主の愛の表われであることがわかります。回心した者の特徴は、主の戒めを喜ぶことです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。 **(2コリント 5･17)**

モーセの十戒を通して示された主の基準は、どのような人間の道徳にも勝るものです。イエス様によって贖われた人間は、みこころにかなった生活をしたいと願い、主の戒めを心から切望する者です。

3 十戒を守ろうとするキリスト者の敗北

キリスト者は自分の喜びである主のみこころを、心から行ないたいと思いますが、実はそのときから大変な失望が始まります。おそらく全身全霊を持って一生懸命にがんばれば、ひとつふたつの戒めを守ることはできるかもしれませんが、しかしすぐにまた誘惑がおそってきて、その誘惑に負け、大きな敗北を経験することになります。

戦いはますます深刻で激しいものになります。信者は、行ないに現われないとしても、戒めを守ることは絶対にできない、ということにすぐに気がつくようになります。つまり、罪の思いや感情が生じると、自分ではどうすることもできないということに気がつくのです。たとえば表面上は姦淫の罪を犯していないようでも、心の中で罪深い情愛を感じるときには、第七の戒めを守ったことにはなりません。実際には泥棒をしなかったとしても、心の中でほかの人の財産や成功をねたむ気持を持っていれば、それは第八の戒めを破ったことになります。

信者は主の戒めを正しく守ろうとすればするほど、実際にはそれが守れないことを、いやというほどに思い知らされます。信者の生活とは、絶えず上に行ったり下に行ったり,立ったり倒れたりするようなものです。信者はいつも心を新たにして戒めを守ろうとするのですが、いつも同じ敗北に終わってしまいます。主の律法を堅く守ろうとすればするほど、その結果は絶望的な戦いになり、しばしば精神病になるほどの心の重圧を引き起こしてしまいます。その結果、信者は「主の戒めを守ることができない」という事実を認めざるをえなくなります。こうした認識は、信者の信仰生活における大きな危機であり、「イエス様の血による贖いという福音によって救われ助け出され」なければ、信仰の挫折、難破となってしまい、破れた翼をもった鳥のように、飛ぶ試みをすべてあきらめる、という結果になります。

イエス様は、モーセの十戒を守ることを、信者にまったく要求なさらない、ということを知るとき、それは信者にとって大きな慰めと解放を意味します。未信者だけでなく信者もまた主の律法を実行することはできません。このことを新約聖書ははっきりと私たちに語っています。

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。 **(ローマ 7･19)**

これは、決して未信者の叫びではなく、信仰者の模範とされているパウロが、霊的な戦いを行なった結果としての叫びなのです。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ 7·24）

回心の経験をした人が、死の体から解放された人間であるならば、神の戒めを守ることは簡単なことだったでしょう。しかし、キリスト者についてもこの体を持つ限り次のように言わざるを得ません。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。（ローマ 7.18）

罪は私たちの肉体の中に入り込んでいますから、私たちがこの体を脱ぎ捨てるまでは、私たちの中に止まります。そして信者でさえも罪に対して抵抗する力を持っていません。罪は恐ろしい力を持って立ち向かってくるので、人間は、敗北せざるをえません。

主の戒めは、私たちにとってそのときいったい何の役に立つのでしょうか。つまり主の戒めというのは、私たちが決して到達することのできない理想にすぎないということなのでしょうか。

残念ながら、多くの信者にとってモーセの十戒は確かに理想にすぎず、罪を犯してはまた赦しを乞い求める、という毎日を繰り返しています。

主イエス·キリストの救いは、本当にそのようなものにすぎないのでしょうか。もしもそうだとするならば、それは実に悲しむべき状態であり、信者は未信者よりも深く罪を認識し、いっそう罪に苦しみ、罪の奴隷にとどまらなければならないことになるでしょう。

決してそうではありません。イエス様の救いは、単なる罪の赦しだけではなく、罪の力からの解放をも意味しているのです。

神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。

（ローマ 6·17、18）

しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。

（ローマ 6·22）

罪の力から解放された人生は、イエス様によって保証されています。それは十戒を通して表わされた、聖なる神のみこころを実行することです。

4 御霊の実としてのみこころの実行

キリスト者にとってもっとも大切なことは、霊的な破産を経験することです。本当に破産してしまったなら、もはや自分の力で神の戒めを実行しようとする努力を止めてしまいます。

勝利の秘訣は、聖霊を通してキリスト者のうちに住んでくださるイエス·キリストにあります。イエス様の救いのみわざはまったく完全なものです。自分の力で神の戒めを実行しようとしても、それは完全な敗北に終わるに決まっています。

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト·イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。（ピリピ 1·6）

イエス様は、私たちに罪の赦しを与えてくださっただけではなく、目的地に至るまで、私たちを導いてくださるお方です。キリスト者はだれでも、イエス様が十字架の上で流された血潮によって、罪の赦しを得ています。そしてイエス様の復活により、私たちは主の永遠のいのちにあずかる者となったのです。私たちの心のうちに聖霊が働いてくださることによって、私たちは神のみこころにかなった新しい生活を行なうことができるのです。

次の事実をしっかりと心に留めましょう。イエス·キリストを自分の個人的な救い主として受け入れた人は、イエス·キリストだけではなく、聖霊の賜物をも同時にいただいたのです。イエス様は聖霊を通してあらゆる信者の中に住み、生き、働いておられます。

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。

（エペソ 3.17）

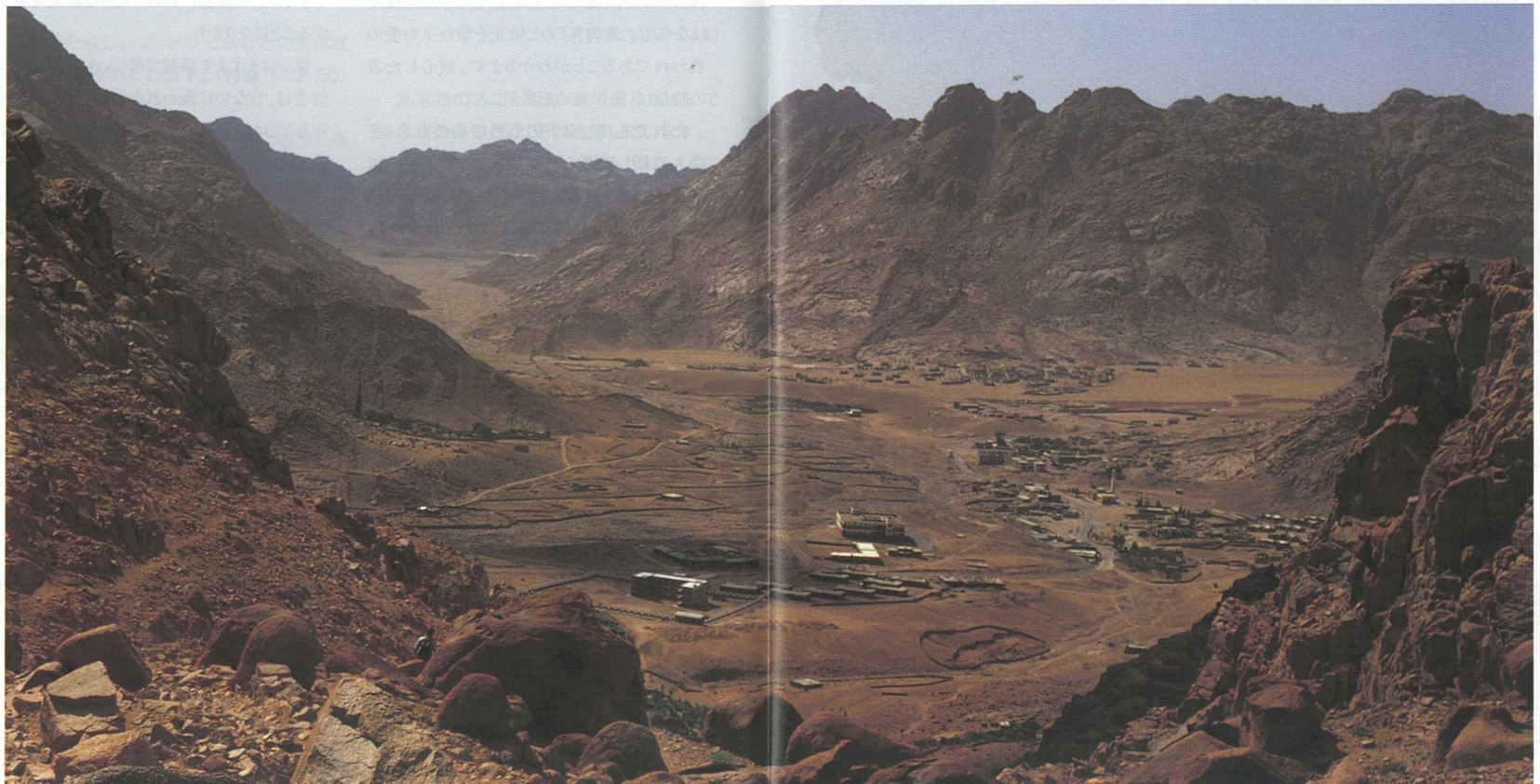
またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。（エペソ 1·13）

イエス様は、かつてこの地上を歩かれたお方、そして神の律法を完全に実行したお方とまったく同じお方として、私たちのうちに生きておられます。そして主の最高の願いは、私たちの生活を通して、主のみこころが完全に現われることです。

イエス様がこの地上に来られたときになさったことを、主は今もなお私たちのうちにあって成してくださいます。私たちのうちにおられるイエス様は、今もなお、私たちを通して聖なる完全な生活をなさることができます。

イエス様は、あなたが置かれている環境の中でそのままあなたを愛することがおできになり、さまざまな誘惑の中で勝利を収めることがおできになります。またあなたにとって荷が重すぎる課題を成しとげることもおできになります。キリスト者のうちに住んでおられるイエス様こそが、新しい生活の秘訣です。

ワダラハという谷



私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ 2·20）

私たちはもはや一人ぼっちではありません。イエス様は、ただ単に私たちと共におられるだけでなく、「私たちのうち」におられ、私たちを支配してくだり、私たちの考え、感情、意思、そして私たちのうちにある罪さえも、支配してくださるのです。

すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。（エペソ 1·21）

すべての上に高く置かれたイエス様は、私たちのうちに住んでおられ、私たちのうちにある罪を抑え、神の戒めを実行できる力を与えることができるお方です。

イエス·キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行ない、あなたがたがみこころを行なうことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

（ヘブル 13·21）

キリスト者は、罪を犯す必要はないのですが、それでも罪を犯すことができるのです。信者は何としばしば、無知や、目覚めていないことから、罪の奴隷となり、再び罪の性質によって支配されてしまうことでしょうか。信者として罪を犯すことはもとの「古い人」の状態に戻ることを意味しています。それは、ちょうど放蕩息子が父の家に戻った後で、再びもとの悪い古巣に戻り、そこで再び豚飼いとして振舞うようなものです。それは必要のないことですが、多くの信者がしばしば経験することです。

キリスト者として、また解放された者として、私たちの犯した罪を赦してくだり、一瞬一瞬の意識、無意識の汚れから私たちをきよめてくださる主の恵みは、何とすばらしいものでしょうか。これこそ、罪深い、罪を犯しやすい信者にとってのすばらしい福音にほかなりません。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（1ヨハネ 1·7）

イエス様は、過去においてきよめてくださっただけでなく、今もなお私たちが悔い改めるときよめてくださるのです。

イエス様の流された血潮はいつも私たちをきよめてくださる力であり、それによって私たちは、いつでも安心して主なる神に近づくことができるのです。私たちのうちにあるイエス·キリストこそが、神の力です。

モーセの十戒は、聖霊を通して与えられました。そして聖霊の目的とするところは、私たちの日常生活を通して神の戒めを実行することです。聖霊はすべてのことができるお方です。主が私たちに与えてくださった聖霊、そして聖霊に満たされた生活については次回にしましょう。



イエス様の「謙遜」

「メサイア」の第23番

2001年9月1日、東京芸術劇場でキリスト集会有志による合唱団、管弦楽団の第6回「メサイア」演奏会が開かれました。その中の第23番の歌詞は次のような内容でした。

彼（イエス）はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。
（イザヤ　53･3）
打つ者に私（イエス）の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。
（イザヤ　50･6）

新約聖書にはその預言の実現したことが記されています。

そうして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを平手で打って、こう言った。「当ててみろ。キリスト。あなたを打ったのはだれか。」
（マタイ　26･67、68）

二つの思い出

この箇所を読むと私は中学時代の担任の先生を思い出します。その先生は太平洋戦争の敗戦時に江田島の海軍兵学校の生徒でしたが、ある時、英語の授業の代わりにその思い出話をしてくれました。その中で、兵隊の訓練ではよく殴られたと言い、「殴られると泣きたくなるっけね」か、または「悲しくなるっけね」と言われました。大人でもそうなんだと、この一言が今でも印象的なのですが、聖書の上記の箇所とイメージがいつも重なるのです。

一方、子どもの場合は、いたずらをして親からひっぱたかれると直ちに思いっきり泣きますが、それでもそれは「悲しい」という感じではなく、元気な証拠のようなものです。ところが、子どもでも身に覚えのないことで平手で打たれたりすると、一瞬キョトンとして、それからさめざめと泣き始めるのです。

我が家の長男が5歳の頃に、1歳の妹のミルクびんを取り上げようといたずらしてる、と見咎められる光景がありました。私はそうと思って長男の頬をピシッとやりましたが、別の時にはたちまち大声で泣きはじめるところ、その時はキョトンとして親を見上げているのです。

長男は妹が自分で取り落としたミルクびんを拾って妹の口に含ませていたところでした。いわれのないことどころか、良いことをしたのにぶたれた長男はほどなくサメザメと泣きはじめ、事実に気付いた私は抱き上げて謝りました。子供が元気に泣くのと違ってサメザメと泣くのは、どこか底深い寒い感じが致しました。

理由のある罰には納得のいくものがあるのでしょう。子どもでもそれが分かり、元気よく泣きます。しかし身に覚えのないときや、軍隊のように訓練と称してただ殴られるときには大人でも心から悲しくなるものだろうと思いますし、ましてやそれが、良いことをしたのに殴られるのであれば、その惨めさはいかばかりかと思います。

十字架の悲しみ

イエス様を十字架につけることを許したピラトの発言です。「あの人がどんな悪いことをしたというのか。」それに対して一つのドイツの詩がこのように答えています。

「主はわれらに、
すべてのよき事をなしたまえり。
盲人に光をあたえ、
不具者を歩ましめ、
われらに父のみ神の言葉をかたり、
悪魔をおいはらい、
嘆く者をなぐさめ、
罪人をもうけいれたまいぬ。
わがイエスのなせしことはそれのみ。」
（皆川達夫訳）

何の罪も咎もないイエス様は十字架の刑罰を受けることになったのです。しかしイエス様の惨めな状況はそれに留まりませんでした。イエス様は、人間からではなく、まことの神様からもっとひどい仕打ちを受けたのです。

昨今は小さな子どもたちが親から虐待されている報道が目立ちます。個々のケースをその子の目の高さで考えると、確かに胸が痛みます。愛されることと頼り切ることだけが心の満足と平安のすべてであるはずの子どもが、何をされているか分からないほどの虐待を受けることの惨めさと寂しさには、大人の想像の及ばないものがあります。しかし、そのように人間が子どもを見捨てることがあっても、神様が子どもの霊とたましいを見捨てることはあり得ません。ところが、イエス様は神様からも見捨てられるという惨めさを味わわれました。

わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。（マタイ　27･46）

人間がどんな惨めさを体験したとしても、またはそれを想像したとしても、神に見捨てられる体験はできないし想像することすらできないのです。けれども聖書にはイエス様がそれを体験されたことが記されています。虐





待される幼子の心持ちを考えただけでも寂しいし恐ろしい。しかし神に見捨てられることはどのように考えてよいか分からないほどの闇であり、寒さであり、渇きであり、孤独であり、空虚であります。

「イエス様の十字架」と一口に言い表し、「十字架に感謝します」と言いますが、こうして考えてみると、その十字架の内容は、あらゆる悲惨な表現を世界中から集めてみてもまだ足りないほどのものですから、私たちは「なぜここまでも」という思いを抱きます。

聖書には次のように書いてあります。

身代わり

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
（イザヤ　53･5）

聖書は、私たちが受けるはずの罰を身代わりとしてイエス様が受けられたと言っているのです。そして、上に記した身代わりの罰は、結局、私たちの罪の大きさを表し、私たちが受けるべきはずだった罰は、想像もつかないほどの闇と寒さと孤独と渇きであることを、それが本来は自分自身の罪の報いであったはずだということを、表しています。

罪と呼ばれるもの

さて、アダムとエバのことは西洋絵画で子供のころから知っていましたし、あのイチジクの葉はいやが上にも興味をそそられていました。しかしアダムとエバのしたことが自分の人生に決定的に影響していることを知ったのは聖書に出会った後のことであり、そしてその確信と納得は年を取るほどにますます動かすことのできないものになってきました。

そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。（創世記　3･6）

食べるのによいといい、目に慕わしいといい、賢くするといい、これらは全部私たち人間の欲しいもので、言わば当たり前のものです。それを聖書は重大な過ちの引き金となったといい、事実、その後の人間全部を支配する罪がこのとき人に入ってしまったと告げています。それではまるで私たちの人生は罪そのものではないか、と言わなければなりませんが、聖書が言っているのはまさにそれです。一人も例外なしにです。

まずエバは創造の神様の言いつけを自分より後ろに置きましたし、さらに自分の欲にしたがって、自分の決めたことを優先するようになりました。何とこれこそ私たちの日常生活そのものではないでしょうか。神様の基準ではこれが十字架に値することであり、真っ赤な罪であると言うのです。しかも、私たちはこのような日常生活から逃れることができません。それどころか、この基準では毎日は罪の積み重ねそのものです。聖書の基準の前では、私たちの毎日はボロの雑巾にも及ばないことになります。私のこの部分が悪いとか、この欠点を直さなければとか、この習慣を止めなければとか、もう少しおしゃべりを慎まなければとか、それはその通りなのですが、聖書はそれらも含めて私たちが丸ごと罪だと宣言しています。

義人はいない。ひとりもいない。
（ローマ　3･10）

このみことばを受け入れることは、思うほどにはた易くありません。私たちは、自分に少しは良いところもあると思っていますから。しかし、主の目から見られたら、どこまでも果てしなく罪深い私たちの心であります。確かに、何と陰険な性質を心の奥に頻繁に見出すことでしょうか。

愛されている

しかし同じ聖書は、そのような私たちが神様から愛されている、大事にされている、心配されていると、よい知らせを伝えています。愛されることだけが喜びと平安の全部であるはずの幼子を虐待する親でも、まだ救われる可能性があります。ですから、どんなにひどいことをした人間も、この神の愛からまだ、最終的には、洩れていません。イエス様の十字架という途方もない身代わりのもとには悔い改めと信仰のもとに計り知れない恵みが備えられています。

主は、…すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。（2ペテロ　3･9）

救われた者が後から驚くのは、主が忍耐をもって自分を待ち続けてくださったことであり、そして、その後もこのような私たちに仕えていて下さるかのような、そのへりくだりであります。主の十字架の、その悲惨は私たちの想像も及ばないものですが、主のへりくだりの愛こそ人間の思いを超越しています。イエス様の一つのたとえ話がそれをよく表しています。

帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうが帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。（ルカ　12･37）

人がもてなしを受けるとき、人は玄関で暖かく迎えられたり、家の中へ案内されたり、席を勧められたり、食事を提供されたり、その家の主人にいろいろ尋ねられたりして喜びに満たされるものですが、食事のときにその主人がエプロンをして給仕を始めたら、ますます本当に受け入れられていることが分かり、招かれた人の喜びは一層増し加わると思います。

あなたがたに言いますが、…ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。（ルカ　15･10）

地上での悔い改めに対してすでにこの通りですから、天の御国での迎えられかたは並大抵のものではありません。その程度はこの世の表現ではかろうじて「主人のほうが帯を締め」という言い方でやっと表すことのできるほどのものなのです。

私たちは丸ごと罪人であり、それはイエス様の身代わりの十字架でやっとバランスを取っていただけるものでありますが、そのイエス様に愛されている、顧みられているという事実こそは人の人生を180度転換させる力があります。

取税人ザアカイやマタイをはじめとする聖書の中の、2000年ほど前に実在した人々は、イエス様から目にみえる形で直接憐れみを受けた人々でした。しかし私たちは目には見えない形で、心の奥深くで主の憐れみをいただき、主に個人的に愛されているという確信をいただいています。この確信は毎日の生活に喜びを与え、置かれた状況の如何にかかわらず、主の恵みに大胆に頼るという歩みに導く力を持っています。なぜでしょう。

謙遜ということ

あなたの謙遜は、私を大きくされます。
（詩篇　18･35）

罪深い者を大きくしてくださる謙遜とは、イエス様の十字架の姿にそれを見て取ることができます。人が幸せになれるのは、神の御子イエス様が人より低くなって下さって、ほんとうの「謙遜」を十字架という御業によって実現してくださったからではないでしょうか。この、驚くべき謙遜の神こそ、まことの創造の神様です。

その主の謙遜の一つの御姿は、日常的な光景の中で弟子達の目の前に現われました。聖書がその時のイエス様の一挙手一投足を事細かに伝えているほどに事は重大でした。それは次のように書かれています。

イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が父から来て父に行くことを知られ、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。（ヨハネ　13･3～5）

弟子達の驚きと当惑が目に見えるようです。しかし、イエス様は自らが敢えて模範を示されたのです。誰もグウの音も出ないほど論理的で明快な模範でした。

それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。
（ヨハネ　13･14）

この光景の中にいて、あるいはずっと後になって思い出して弟子達は自分自身を恥じ入り、心の高慢の罪のひどいことに気付き、主の十字架のもつ個人的な意味に心が開かれていったのではないでしょうか。自分の心の罪の深さに目を開かれることなくして、十字架への感謝が増し加わることはありません。

砕かれたこころの生活

主のあらゆる模範によって砕かれた私たちの心は、主のとられた謙遜の姿に清い畏れと従順を覚えるようになり、毎日の生活の中で自分の心の中の罪を見るにつけ、この方のもとに留まりたい、心から礼拝したいと思うようになります。

主は私たち人間のために人間よりも低くなられました。この事の重大さを改めて思い起こしましょう。謙遜の主、私たちの身代わりの犠牲の神、イエス様こそ永遠から永遠にいたる真の神様です。

彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」
（黙示録　5･12）

松見敬三
略歴／日本アイ･ビー･エム（株）
勤務　岩手県出身、下橋中、盛岡一高、上智大学ドイツ語学科卒、安宅産業（株）に約5年勤務の後、現職に。







イエス様による奇蹟

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。
わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。
また、生きていてわたしを信じる者は、
決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」
（ヨハネ　11･25、26）

聖書を読まれたことのない多くの方々でも、イエス様による奇蹟については耳にされたことがあるのではないでしょうか。実際に聖書を読んでみますと、旧約聖書にも新約聖書にも奇蹟についての数多くの箇所があります。この中には紅海が二つに割れて、モーセに率いられたイスラエル人がエジプトより脱出できたという有名な記載もあります。しかしながら、イエス様ご自身のなされた奇蹟の7、8割は病んでいる人、生まれながら障害を持っている人、飢餓に陥っている人など弱い人々に直接会われてなされた奇蹟であるという大きな特徴があります。これらの病気には熱病、らい病、中風、四肢の麻痺、出血傾向、腫瘍、視力聴力障害、精神疾患、栄養失調など実にさまざまなものがあったことを聖書は記しています。そして端的に、

イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。
（マタイ　9･35、36）

と述べています。

このような視点からイエス様を見ますと、現代的表現を借りていえば、イエス様は不治の病をも治す超絶的な医者であるといえるかもしれません。事実、イエス様は医者をたとえに用いて、

「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」（ルカ　5･31、32）

とおっしゃられているほどです。

イエス様がこのように多くの病める人々を治されたのは2000年前のことです。今では、日本にいて病気になれば医療を受けることができるし、しかも、かなりの病気は治るとされています。しかし、医者が病気を治すことができるようになったのは、わずか50年前くらいのことです。ペニシリンやストレプトマイシンなどの抗生物質の発見により、最も一般的な病気であった肺炎、腸炎や結核などの感染症を治すことができるようになったのです。医者が病気を治すことができたという出来事に、最も驚いたのは医者であったといわれているほどです。なぜ医者がそれほど驚いたかといえば、何千年もの間、医者によって考え出された数限りない治療法は客観的に評価すると、ほとんど病人を治すことができないと判明していたからです。むしろ、病人の命にとって害になる治療法ばかりといっていいほどでした。このような事実に照らし合わせてみますと、イエス様の時代に、無数の、しかも様々な病気に苦しむ人々が次から次へと治されたことは、まさに奇蹟そのものであったといえます。ですからイエス様の行く先々に大ぜいの苦しむ人々が集まってきたと聖書は述べています。

しかし、ある時イエス様は10人のらい病人を治された時に、このように言われました。

「10人いやされたのではないか。9人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」
（ルカ　17･17、18）

なぜイエス様はこのようなことをおっしゃられたのでしょうか？　確かに、当時不治の病であったらい病が治ることは、9人にとっては信じられないほど素晴らしいことでした。けれども、らい病が治った後、9人にとって本当に薔薇色の人生が待っていたのでしょうか？一方で、10番目の外国人に対して、イエス様はこのように話されています。

「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」（ルカ 17･19）

現代の最先端医療として臓器移植があることはよく知られています。けれども、この医療には提供される臓器が不足しているという大きな問題があります。ですから、提供者の善意を得て、また、さまざまな制約を乗り越えて臓器移植を受けられるということは大きな恵みであると思われます。心臓については、日本国内で心移植を受けることができた方はまだ10人前後にすぎません。しかしながら、心臓移植で新しい心臓をもらっても、すべての問題が解決するわけではないのです。すなわち、臓器移植には拒絶反応という難題が付随しているのです。手術にともなうリスクを乗り越えても、急性期の拒絶反応と生涯にわたる慢性の拒絶反応との戦いが待っています。新たなガンが発現する頻度も高くなります。このように考えてみますと、確かに心移植によって生命予後の延長は可能です。しかし、心臓病が治癒するのではなく、心不全という病気が拒絶反応に置き換えられるのに過ぎないことがわかります。ですから、病気が治るということよりも、新たな臓器を提供してもらって新たな人生をどのように生きるか、ということがより重要になるのではないでしょうか。

「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。」
（ヨハネ　11･4）

人間は誰でも目の前の大きな問題に心を捕われます。健康問題などはその代表でしょう。しかし、この聖書のみことばにあるように、イエス様は眼前の大問題ばかりではなく、人間にとって生涯を通して最も大切な問題にこそ、目を留めるように言っておられます。今日、大多数の日本人は大病を患うことなく毎日を送り、仕事、勉学、余暇などを中心に生活しています。闘病生活を通してはじめて健康のはかなさを実感し、生とは何か、死とは何かを考え、そして、人生の意義･目的を真剣に考える機会が与えられる人が多いのではないでしょうか。確かに進歩した現代の医療によって健康が維持され、病気が治ることはとても良いことでしょう。しかし、ふだんは取り扱われなくても、最も確実な数字があります。それはヒトの死亡率は100%であるという事実です。ですから、人間にとっては死の問題を今解決するのか、先送りするのかのいずれしかありません。欧米では成人する頃に、臓器移植と関連づけて死について家族で話し合う機会を持とうとする動きがありますが、日本では死はいまだタブー視されています。第二次世界大戦後の廃墟から奇跡的な復興を遂げ、人類の歴史上稀にみる繁栄といわれた日本経済も、不良債権の処理を10年以上も先送りにした結果、回復不能とまでいわれるようになってしまいました。一人ひとりの人生において、本当に重要な死の問題の解決を同じように先送りにしていいのでしょうか？

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」
（ヘブル　4･7）

私の義父は3年前に昇天しました。肝硬変に肝癌を併発して外科的手術を受けたのですが、しばらくして肝不全となったのです。イエス･キリストを受け入れ信じていましたが、10年にも満たない信仰生活でした。しかし、イエス様は義父を憐れんでくださいました。死に直面しても平安と希望が与えられたのです。多くの友人･知人が面会にきてくれましたが、闘病生活をしている義父によって勇気づけられました。死の数日前に多くの悔い改めをして、きよめられて天国に旅立ちました。主治医の先生は医学教育では日本でも有名な方ですが、義父のような感銘深い臨終に出会ったのは初めてと言われて、私たちの家庭集会にも参加してくれました。

また病の床にある義父と、何度も長く接する機会のあったひとりに義母の双子の妹の主人がいました。3ヵ月後、彼は進行性の胃癌で、しかも肝臓にも転移していることが判りました。義母の妹の主人もイエス･キリストを受け入れ信じていましたが、信仰生活は3年にもなっていませんでした。しかし、自分の命があと半年もないという現実を、平安を持って受け止めることができました。誰でも自分の命があと1年もないとわかればショックを受けます。どのような死に方をするのか恐怖も覚えるでしょう。しかし義母の妹の主人は、病床の義父との心の交わりを通して、イエス･キリストを信じる者に与えられる恵みを実際に目の当たりにし、体験したのです。

神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。
（ヘブル　13･7）

このみことばのとおりに、イエス様は自分にも必ず同じようにしてくださるとの確信を持っていました。自分で努力をしたり、虚勢を張ったりする必要は全くないことを知っていました。やはり、多くの友人･知人が彼を見舞いに行きましたが、義父と同じように、病人である彼によって希望と勇気を与えられたのです。私もそのひとりです。毎日を医療現場で働いていると、人間という存在が如何に弱いものであるかが痛感させられます。しかしながら、一人ひとりの人生のなかで、最も弱々しく依存的で、大ぜいの人々によって守られるべき死の床において、むしろ、周りの人々に平安と希望を与えることができるとは何と不思議なことでしょう。これこそがイエス･キリストによる信仰の力であり、イエス様の奇蹟の本質であると思います。そして、イエス様はきょうも一人ひとりにこのように問いかけられているのです。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」
（ヨハネ　11･25、26）

近森大志郎
東京医科大学講師　土佐中、土佐高、山口大学医学部卒、聖路加国際病院、ロンドン大学セント･ジョージ医学校留学、高知医科大学を経て現職



がんばらなくても。いいんだよ。

あなたが感じているなやみは、なんですか。勉強のこと、クラブ活動のこと、ともだちのこと。そのなやみを、自分の力でなんとかしようとしてはいませんか。

私は中学校の先生をしています。私もイエスさまと出会うまえは、努力ひとすじの先生でした。教室には、おおきく「努力」とかかげ、「努力しなければ、なんの価値もない。努力がすべて!」と生徒をはげましてきました。自分のハンパもゆるせず、なんでもキッチリやらなければ気がすみませんでした。

そんな私に、人の弱さや努力しないことを、ゆるせるわけがありません。生徒ができなければ、「なぜできないのか!」と腹を立てるような者でした。それなりの結果を出すことができても、心の中はいつも不安で、なにかにおびえていました。そんなときに、私は聖書に出会いました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ　11・28)

このみことばに触れたとき、どういうわけかわかりませんが、とめどなく涙があふれました。自分の弱さを隠そうと、つっぱり続けてきた自分のことを、主イエスさまはすべてご存じであったことを知り、私の目は開かれました。

以前は、生徒が問題やなやみをかかえていると、自分の知識や経験、努力によってなんとか解決しようとしていました。いつも、「がんばってみようよ。」と話をしめくくるのでした。

しかし、イエスさまの十字架が自分のためであることを知ってから、すこしずつですが変わっていきました。子どもの心の叫びはおとなが考えているよりずっと深いところにあること、彼らがいくらがんばっても、がんばりきれないことがたくさんあることを、理解できるようになっていったのです。

そして、イエスさまの前に問題をさし出して「私には何もできません。」とおねがいすると、かならずイエスさまが助けてくださることを、なんども体験することになりました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。
(1ペテロ　5・7)

涙を流しながら、「先生、もう何もかもダメだ!」と叫んだ生徒がいました。ニック・ネームが「ピンボケ」。劣等感のかたまりで、まさに絶望の淵に立たされていたのです。イエスさまは、この少年の心にも、ひとすじの光をあたえてくださいました。

この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。
(1コリント　1・26〜28)

私たちは自分の内側を見るとき、なにも良いものがないことに気づかされます。イエスさまは、もちろん、そのこともご存じです。イエスさまは、弱さの上に豊かに働かれるお方なのです。

これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。(1コリント　1・29〜31)

またあるとき学校に来られなくなった生徒もいました。クラブ活動も、勉強も、ともだちづきあいも、すべてイヤになってしまったのです。「どこまで、がんばらなければいけないのか。いつまで良い子のふりを続けなければならないのか。すべてがむなしく、終わりが見えない。生きているのが苦しくてしかたがない。」と殻にとじこもるばかりでした。しばらくすると、このようになやむことが悪いことだと思いこみ、自分を責めるようになりました。心の中にいるもうひとりのイヤな自分がどんどん大きくなり、どうやって向き合ったらよいのかわからなくってしまったのです。だれにも相談できず、終わりのないトンネルの中にいるようだったそうです。彼女は長い間、ひとりで苦しみました。まわりのおとなはもちろん、お医者さんでさえ、何もしてあげることができませんでした。そんなとき、彼女はイエスさまに出会い、素直に心の内がわにあることをイエスさまに話したのです。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。
(詩篇　32・5)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身を捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ　2・20)

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。(マタイ　5・3)

これらのみことばによって、彼女は生まれ変わりました。「こんな自分でさえも、イエスさまの十字架によって赦され、愛されている。」と確信することができて、うれしくなったのです。

だれでも、いろいろなことでなやみ、苦しみ、自分のことがイヤになるという経験をすることがあるでしょう。イエスさまは、そんなあなたの心の内側も、すべてをご存じです。

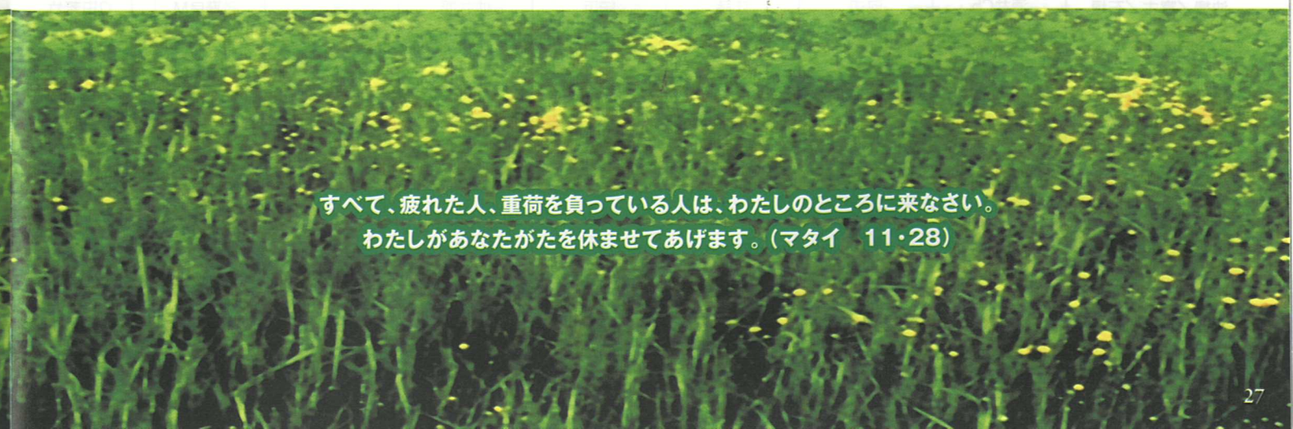
「弱い」とか「小さい」ということは、悪いこととして受け取められがちです。しかしイエスさまは、そのような「弱さ」にこそ働かれるのです。これがイエスさまの愛です。小さくて弱いあなたは、イエスさまから愛されているのです。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。(イザヤ　43・4)

江田昌弘／神泉中学校教諭　神奈川県出身　東橘中、深谷第一高、大東文化大学外国語学部卒







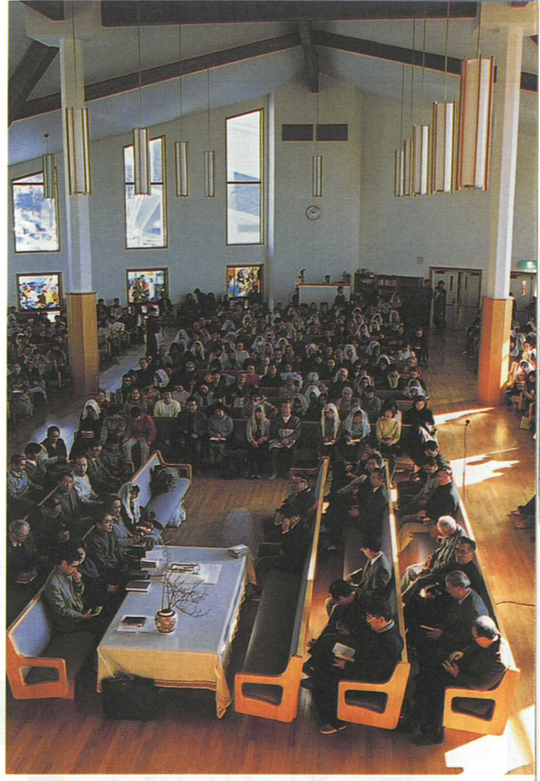
メッセージ当番表（7月— 9月）

「主にあって、その大能の力によって強められなさい。」（エペソ6:22）　「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」（ピリピ4:4）

	7月				8月				9月				
	7日	14日	21日	28日	4日	11日	18日	25日	1日	8日	15日	22日	29日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本	芳竹		中山Y	武井	藤原N	青柳	中山Y	岩下	中山Y
青森	笠井							福島		キャンプ		中山Ch	
仙台／盛岡	蘇畑	松田	松見	深沢	高田		高田	須藤Y	立之	キャンプ	川股	菊池	増森
新潟		山下		江藤				柿沼M	富田	笠井		重田H	野田
宇都宮	藤井	谷口	御任	金井	川股		見目	谷口	見目	野田	吉田	御任	鈴木H
日立／土浦／大洗	南村	羽石	平山	和田S	松田		松見	藤田	槙野	後藤	上村	藤田	吉田
川越	代田	小野沢	川股	古田K	野口T		御任	江田	岩上	飯島H	上野	内藤	大庭
春日部	川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村		滝	大庭	宮田	野口O	会沢	辻	小西
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	槙野	滝	末村	小西	小川	山口I
市川	道川	田中J	滝	黒沢	小西		岩崎	会沢	田尾	飽戸	鈴木T	小島	大沢
東京 10:20	野口O	重田S	野田	飽戸	白石K	池田D	辻田H	菊池	酒井Ch	藤本	青柳	平山	古田K
東京 14:00	小島	藤田	久田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田M	河辺	岩本	染野	江藤	蘇畑
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	中島Y	中山Ch	中村K	野口H	柿沼Y	旭	佐山	田中J	小々馬
横浜	田中J	平山	酒井M	小川	兵藤		松田	山田K	柿沼M	菊池	寺田	黒田	中山Ch
相模原	江藤	松見	石井A	加藤S	飽戸		神沢	旭	道川	内藤	山田K	立之	酒井M
新島													
御代田	若山	織田	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	羽石	平井	植原	キャンプ	重田S
伊那	末永	片桐	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	植原	山田M	小野沢	キャンプ	中島Y
富山	吉田	キャンプ	柿沼Y	大下	片桐		富田	仲井間	平	羽石	山下	野口O	酒井Ch
藤枝	今川	内藤	金子	野田	菊池		酒井M	染野	武井	芝田	白石Y	小林	平山
掛川	辻田H	酒井M	今川	大塚	秋本		大塚	青柳	飽戸	石塚	岩上	染野	大塚
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五		河辺	辻田H	倉橋	清水N	大高	白石Y	清水Y
名古屋／豊橋	酒井M	菊池	今村	山科	津田		会沢	松本S	辻田H	田中J	今川	新井	上田
金沢			伊牟田（20日）	重田S（26日）				伊牟田（24日）			和田Y（15日）		重田S（27日）
近江八幡		古田K			会沢					吉田			
大阪	大場	那須	岩崎	酒井Ch	内田		小久保	渡辺S	池島	広田	キャンプ	寺田	山科
芦屋	羽石	上田	伊牟田	吉田	滝		酒井Ch	新井	森島	小久保	キャンプ	中山K	長岡
西神	飽戸	渡辺S	岡本M	池島	小久保		小川	内田	田中J	久田	キャンプ	渡辺S	小山
島根			福代				森田			瀬島		黒田R	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	森島	芳賀		瀬島	渡部Y	上田	杉本	岡本M	森田	秋本
児島	キャンプ	広橋	近森	内田H	久田		渡辺S	内田H		岡本M	後藤	福島	内田H
高松／徳島	キャンプ	加藤S	会沢	山本	青柳		広橋	後藤	中山K	野間	岡本H	河野	高島
高知	キャンプ	岡本H	飯守	今川	野間		池田D	伊野	金子M	河野	古田K	池田J	窪内
松山／西条	キャンプ	野間	岡本H	和田Y	光藤		近森	岡本M	白石K	森島	内藤	古田K	広田
福岡／別府	浅野	岩本	古田K	庄野	重枝		松井	小山田	中野	滝	別所	今村	キャンプ
長崎／佐世保	別所	辻田H	庄野	松井	辻田M		山口H	松井	浅野	染野	加藤M	北原	キャンプ
宮崎／小林	藤原N	上野	河辺	武井	岩本		菅原	桜本	古田K	平山	松井	古田M	キャンプ
鹿児島／熊本	庄野	江藤	須藤T	平山	石塚		羽石	加藤M	上野	古田M	辻田H	松井	キャンプ
沖縄／宮古／石垣	酒井Ch	河辺	江藤	崎浜	仲井間		平良M	芳竹	池田D	蘇畑	野口T	代田	喜屋武
米国／カナダ											古田M		和田Y
グアム			古田M				古田M						
バンコク				石井A	平山				キャンプ				
喜びの集い	6-7	13-14	19-21	26-28	2-4	9-11	16-18	23-25	30-1	7-8	14-15	20-22	28-29
	松山	富山	御代田	御代田	御代田	御代田	御代田	御代田	バンコク	仙台	芦屋	御代田	宮崎
祈り会（7:30PM～）	4	11	18	25	1	8	15	22	25	5	12	19	26
	野田	重田S	田中J	奥	小島	酒井Ch	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本	大須賀	和田Y
Iペテロ	1. 1-2	1. 3-9	1. 10-12	1. 13-16	1. 17-19	1. 20-21	1. 22-25	2. 1-3	2. 4-8	2. 9-10	2. 11-12	2. 13-17	2. 18-25

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。
※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

ニューフェイス：須藤辰郎（吉祥寺）



2002年 よろこびの集い

※創刊号掲載の日程に一部変更があります。

7 July
- 6日－ 7日　松山
- 13日－14日　富山
- 19日－21日　御代田
- 26日－28日　御代田

8 August
- 2日－ 4日　御代田
- 9日－11日　御代田（10日：コンサート）
- 16日－18日　御代田
- 23日－25日　御代田

9 September
- 7日－ 8日　仙台
- 14日－15日　神戸
- 20日－22日　御代田
- 28日－29日　宮崎

10 October
- 5日－ 6日　福島
- 13日　東京「メサイア」コンサート
- 18日－20日　御代田
- 26日－27日　徳島

11 November
- 1日－ 3日　御代田
- 9日－10日　島根
- 15日－18日　バンコク
- 21日－24日　サンフランシスコ
- 30日－12月1日　新潟

12 December
- 7日－ 8日　福岡
- 14日－15日　沖縄
- 31日－1月2日　御代田（1日：コンサート）

メッセージ当番表（10月— 12月）

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」（黙示録22:12）

	10月				11月				12月				
	6日	13日	20日	27日	3日	10日	17日	24日	1日	8日	15日	22日	29日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本	芳竹	加藤S	中山Y	武井	藤原N	岩崎	中山Y	岩下	中山Y
青森	キャンプ			笠井		藤田		福島				中山Ch	
仙台／盛岡	キャンプ	松田	松見	深沢	奥	片桐	高田	須藤Y	立之	蘇畑	川股	菊池	増森
新潟		山下		江藤		富田		キャンプ	野田	笠井		重田H	柿沼M
宇都宮	藤井	谷口	御任	羽石	川股	金井	見目	谷口	見目	野田	吉田	御任	鈴木H
日立／土浦／大洗	南村	羽石	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	藤田	槙野	後藤	上村	藤田	吉田
川越	代田	小野沢	川股	古田K	野口T	白石Y	御任	江田	岩上	飯島H	上野	内藤	大庭
春日部	川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村	御任	滝	大庭	宮田	野口O	会沢	辻	小西
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	槙野	滝	末村	小西	小川	山口I
市川	道川	田中J	滝	黒沢	小西	古田	岩崎	会沢	田尾	飽戸	鈴木T	小島	大沢
東京 10:20	野口O	平山	野田	飽戸	白石K	池田D	辻田H	菊池	酒井Ch	藤本	青柳	重田S	古田K
東京 14:00	小島	藤田	久田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田	河辺	岩本	染野	江藤	蘇畑
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	中島Y	中山Ch	中村K	野口H	柿沼Y	旭	佐山	田中J	小々馬
横浜	田中J	和田Y	酒井M	小川	兵藤	立之	松田	山田K	柿沼M	菊池	寺田	黒田H	中山Ch
相模原	江藤	松見	石井A	加藤S	飽戸	代田	神沢	旭	道川	内藤	山田K	立之	酒井M
新島													
御代田	若山	重田S	キャンプ	片桐	キャンプ	長岡	織田F	小島	羽石	平井	植原	ベック	ベック
伊那	末永	片桐	キャンプ	田中J	キャンプ	片桐	長岡	織田F	植原	山田M	小野沢	平井	中島Y
富山	吉田	大下	柿沼Y	青柳	片桐	仲井間	富田	長岡	平	羽石	山下	野口O	酒井Ch
藤枝	今川	内藤	金子	野田	菊池	芝田	酒井M	染野	武井	芝田	白石Y	小林	平山
掛川	辻田H	酒井M	今川	大塚	秋本	神沢	大塚	青柳	飽戸	石塚	岩上	染野	大塚
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五	会沢	河辺	辻田H	倉橋	清水N	大高	白石Y	清水Y
名古屋／豊橋	酒井M	菊池	今村	山科	新井	和田Y	会沢	津田	辻田H	田中J	今川	上田	松本S
金沢				重田S（25日）		伊牟田		重田S（29日）			重田S	和田Y	
近江八幡		古田K			青柳					吉田			
大阪	大場	那須	岩崎	酒井Ch	内田	森島	小久保	渡辺S	池島	広田	中山K	寺田	山科
芦屋	羽石	青柳	伊牟田	吉田	滝	瀬島	酒井Ch	新井	森島	小久保	池島	中山K	長岡
西神	飽戸	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田	田中J	久田	森島	渡辺S	小山
島根			福代			キャンプ	森田			瀬島		黒田R	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	森島	上田	キャンプ	瀬島	渡部Y	芳賀	杉本	岡本M	森田	秋本
児島	河野	広橋	近森	キャンプ	久田	野間	渡辺S	内田H		岡本M	後藤	福島	内田H
高松／徳島	山本	加藤S	会沢	キャンプ	青柳	笠井	広橋	後藤	中山K	野間	岡本H	河野	高島
高知	鈴木T	岡本H	飯守	キャンプ	野間	近森	池田D	伊野	金子M	青柳	古田K	池田J	窪内
松山／西条	和田Y	野間	岡本H	キャンプ	光藤	江藤	近森	岡本M	白石K	森島	内藤	古田K	広田
福岡／別府	浅野	岩本	松井	庄野	重枝	山口H	滝	小山田	中野	キャンプ	別所	今村	
長崎／佐世保	別所	辻田H	染野	松井	辻田M	別所	庄野	松井	浅野	キャンプ	加藤M	北原	
宮崎／小林	藤原N	上野	河辺	武井	岩本	染野	平山	桜本	古田K	キャンプ	松井	菅原	
鹿児島／熊本	庄野	江藤	須藤T	平山	石塚	重枝	古田M	加藤M	上野	キャンプ	羽石	松井	
沖縄／宮古	酒井Ch	河辺	江藤	崎浜	仲井間	松見	平良M	芳竹	蘇畑	池田D	キャンプ	代田	喜屋武
石垣	古田K			喜屋武		重田S			平良M			芳竹	
米国／カナダ									キャンプ		古田M		和田Y
グアム			古田M				古田M						
バンコク				石井A	平山		キャンプ						
喜びの集い	5-6 福島	13 メサイア・コンサート	18-20 御代田	26-27 徳島	1-3 御代田	9-10 島根	15-18 バンコク	23-24 新潟	28-2 サンフランシスコ	7-8 福岡	14-15 沖縄		31-2 御代田
祈り会 (7:30PM～)	3	10	17	24	31	7	14	21	28	5	12	19	26
	野田	重田S	田中J	清水Y	小島	酒井Ch	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本	大須賀	和田Y
Iペテロ	3. 1-7	3. 8-9	3. 10-11	3. 12-17	3. 18-22	4. 1-6	4. 7-11	4. 12-14	4. 15-19	5. 1-4	5. 5	5. 6-9	5. 10-14

新しい集会：石垣

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。　※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

→案内チラシを転載



Messiah
G.F. Händel

オラトリオ
ヘンデル作曲「メサイア」

ブルーメンシュトラウス混声合唱団
ブルーメンシュトラウス管弦楽団

ハレルヤ。いのちのあるかぎり、
私の神に、ほめ歌を歌おう。詩編146・1、2

The 8th Concert in Tokyo

10月13日（日）
2002年



渋谷 Bunkamura
オーチャードホール

開場 12:20　開演 1:00
全席指定 ¥2,000

できるだけ多くの人に聴いていただくために

キャンセル・チケットの払戻しは、9月13日までです。

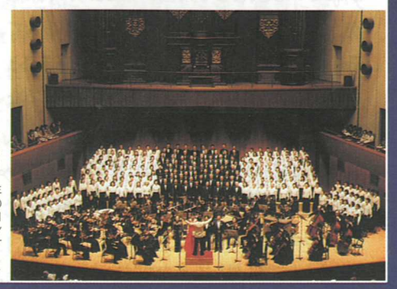
使用しない手持ちのチケットは、なるべく早く座席番号を下記の福島までお知らせください。

空席が生じた場合は、会場で当日券を発売します。（発売しない場合もありますのでご了承ください）

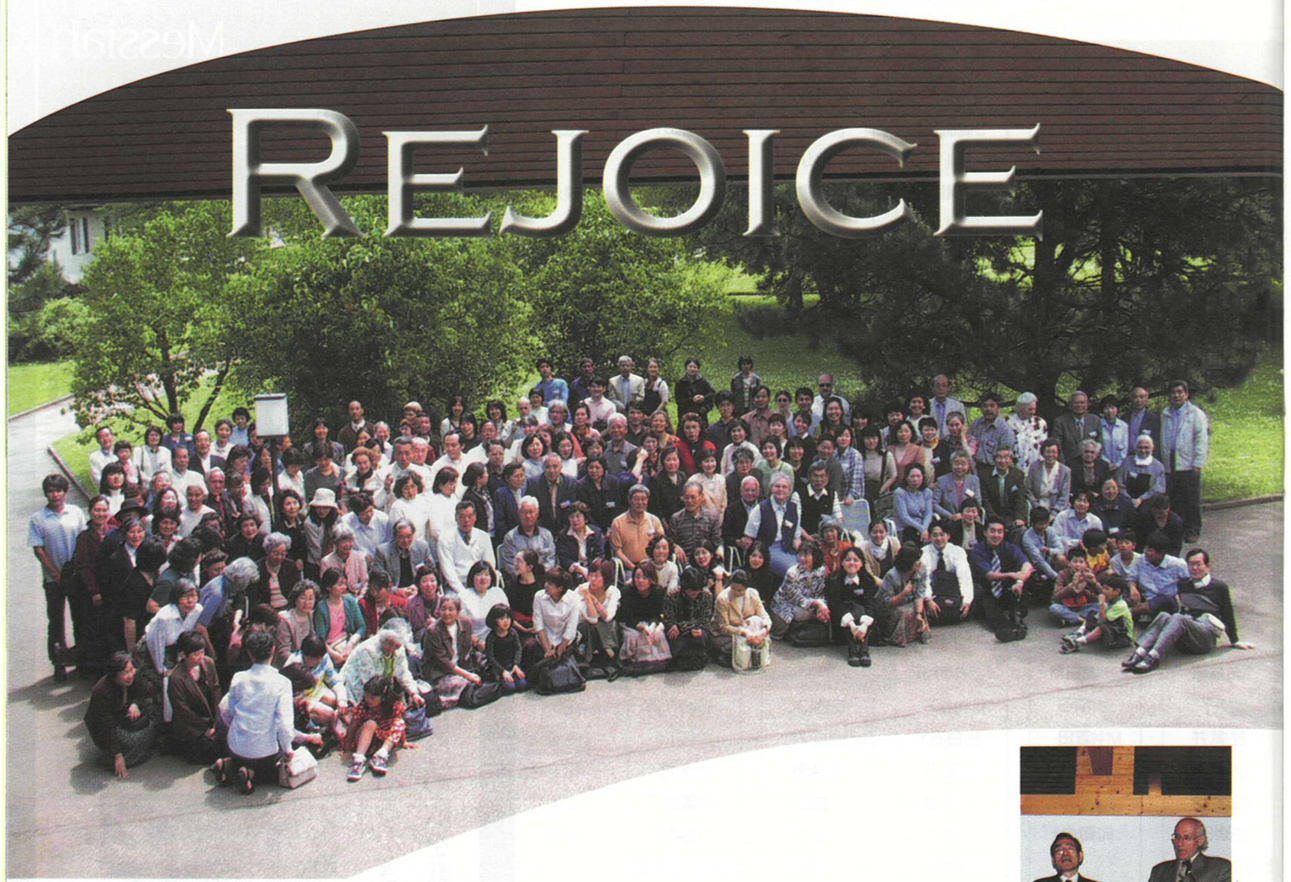
お問合せ 受付時間 11:00～21:00

チケットのお問合せ
Tel＆Fax
03-3594-7032 福島

コンサートのお問合せ
Tel＆Fax
03-3396-6863 藤原



2001年のコンサート 池袋の東京芸術劇場にて



ドイツよろこびの集いに参加して

青柳　惇

主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。
（エレミヤ　17･7､8）

ドイツキャンプのこの楽しい時もアッという間に過ぎ去り、あと一日を残すのみとなりました。神様が創造されたこの美しい豊かな自然に囲まれ、そしてドイツと日本から来た兄弟姉妹との主にある親しい交わりの中におかれていると、まるで天国にいるように、神様が、イエス様が、私たちのすぐ身近におられて、そして生きて豊かに働いていてくださることを覚えることができます。夢を見ているような思いです。

確かにここには、会社も仕事もありません。煩わしい人間関係もありません。新聞もテレビもありません。サッカーのワールドカップもありません！ でも、果して私たちはいま「夢の中」に居るのでしょうか。

このキャンプのメッセージである兄弟が引用されたように、イエス様に目をあけられた生まれつきの盲人（ヨハネ9章）は、肉の目をあけられただけでは最初のうちは、イエス様が何者かわからなかったのに反し、心の目をあけられるに及んでようやく、イエス様が神から出ておられることを悟るようになりました。この盲人と同じく私たちも肉の目はあいていながら、ふだんは日常の生活の一つ一つに心の目を奪われて、主が私たちのすぐ傍に居て私たち一人ひとりのために、生きて働いていてくださる事実に気がついていないだけなのではないでしょうか。

ある兄弟は、ドイツキャンプのこの一週間が「全てはイエス様だけだ」という思いを与えられた、目からウロコが落ちるような衝撃的な一週間であったことを証しておられました。日常の生活の雑事から解放され、心の目が開かれているいまこの時この場こそが真の世界であり、つね日ごろは心の目が閉ざされていて真の世界が見えていない、言い換えれば、「夢を見ている」ということになるのではないでしょうか。

心の目が開かれると、主の存在がそして主のみ働きがよく見えてきます。すべてのことの働きと実りは、私たち自身がなすものではなく、すべてが主のみわざであることがよくわかります。すべてに働いてくださるのは、自分ではなく主であり、私たちはただ主に信頼し主を頼みとして主のみわざを静かに待ち望んでおればよい、ということです。

事実、この度のキャンプで伝えていただいた兄弟姉妹方の学びやお証しは、一様に主のみ働きを認め感謝し、主のみわざをほめたたえるものでした。

あるドイツの兄弟は、主が働いてくださらなければ自分自身は何もできない、何をやってもムダ。だから「主よ語ってください。私は聞いております」という姿勢の大切さを指摘されました。

またある兄弟は、自分の知識と技量と経験こそが難病のガンの手術を成功させたと思っていたのは、自分の思い上がりであった。実のところは、それはすべて主のみわざであり、自分はただその道具に使われたに過ぎないことを悟らされた、と証しされました。

ある兄弟は、ガラテヤ人への手紙1章11､12節を引用されて、あの偉大な伝道者パウロでさえ、彼が宣べ伝えた福音は人間によるものではなく、ただイエス･キリストの啓示によって受けたもの、自分はただそれを伝えるための道具にしか過ぎない、との彼の告白を伝えてくださいました。

また別の兄弟は、同じパウロが「主のより通りよき管」となるため、肉体に一つのとげを与えられた（第2コリント12章）。主の力が完全に現わされるため、主はパウロに弱さを与えられた。しかしパウロはむしろその自分の弱さを、主の栄光のために喜びそして誇りとしたことを伝えてくださいました。

さらにまた別の兄弟は、毎日の生活を自分の内に住んでくださっている御霊（みたま）に聞き従い、その導きによって生きることの大切さを指摘され、そしてある姉妹は、そのように御霊の働きにただ委ねていると、人間の力では及びもつかない大きなみわざを主は成し遂げてくださる。どうしても許せなかった父親だったけれど、その父親のために祈りたいという思いを与えられた息子さんの例をひいて、お証ししてくださいました。

このようにこの度のキャンプでは、人間の無力さとそれに対比して主のみわざの大きさについて、そして人間がなし得ることは、ただ主に信頼し主を頼りとし主のみわざを静かに待ち望むことだけである、ということをあらためて学ばせていただきました。
（2002年6月10日､ドイツ･ミヘルスベルグで）

■私を変えたドイツの日々■

――寄せられた2通の手紙から――

主の御名を賛美いたします。ドイツから帰国して1週間が過ぎました。

ミヘルスベルグの姉妹方の誠実なおもてなし、心温まる、思いやりあふれた笑顔などに触れ、感謝と喜びいっぱいの旅でした。今までの苦しみ、悲しみ、思い煩いはすべて消えて、寝つきも早く、目覚めもさわやかであったこと、よく食べ、よく学び、みことばの真実が分かる集いでした。

主にある兄弟姉妹として、よく祈ってくださり、また私も祈ることができました。

イエス様のご支配のままに、つねに御霊に導かれ、従順な器となれるよう静まり、主を待ち望みます。主の愛をより近く、感じることができる者となりました。

帰国する前日より、何かがすっぽりと抜け落ちたような空っぽの状態の自分に気がつきました。

私のうちで、思い煩いが増すときに、あなたの慰めが、私のたましいを喜ばしてくださいますように。
（詩篇　94･19）

今まで肉に生きていた自分、頑張って道を切り開いて行こうとする頑固さ、意識して強がっている苦しさ、これらすべてから救い出されたのだと、よく分かりました。なにもできない者ですが、空しさの中に、主が御霊を通して、愛を注いでくださいます。

私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。（ヘブル　12･1～3）

主の御名を心から賛美します。ドイツ･ミヘルスベルグでは言葉に言い表せないほど豊かな主のご臨在を確信でき、たくさんの喜びをいただき、元気に帰国するができました。私たちをありのままに受け入れてくださり、祈ってくださり、言葉を超えて主のみこころを伝えてくださっている主にある兄弟姉妹の方々に、心から感謝しています。

私は長い間、主に救っていただいた確信と喜びは知っていたと思いますが、主と共に歩むという点に関して盲目な者、主に飢え渇いて求めなかった鈍感な者で、無知な者でした。

最近になり、生活が以前と一変し、自分の時間が多くなったことを通して、自分自身と主との関係に初めて目が開かれた思いがしています。

自分の中には何も良いものがないことは、時間の経過とともにその都度、主に悔い改めてきたつもりでした。しかし、何も変わらない自分、主を喜ばせたいと願っても、何をしたらよいか分からず、ただ同じところをくるくる回っているようにすら感じていました。

そんな中、はっきりと自分のことばかりで悩んでいる私そのものが、主を悩ませているのだと気づかせていただきました。そして主イエスは、私のわがままな性質そのものの代価を無条件に支払っていてくださったことを、あらためて知り、涙があふれました。そのとき「貧しい者よ。主をほめよ！」という詩篇のみことばに励まされました。

自分が貧しく､無力な者であると知ったとき、主の十字架上での「彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」という、とりなしの祈りが、私のためにもしてくださったのだと分かり、私を深い穴から優しく救い出してくださったのです。

それからは、詩篇23篇を通して、主がそばにいてくださることはこの上もなく幸せと思い、初めの愛に立ち返らせていただいたようにすら感じる毎日です。

どんなときにも、またどんなことからも、主は必ず最善に導いていてくださると思うと、とてもらくになりました。主は、こんなどうしようもない者を、見捨てないで導いてくださるなんて、奇蹟であり、忍耐そのもののお方なのですね！

いつも心を煩わせるばかりの者に対して、主がくださるのは慈しみと愛と憐れみだけでした。



イエス様こそ私の人生の主人公です

奥　淳治

ドイツの皆さん,こんにちは。私は奥淳治と申します。ふだんは横浜集会に集っております。今回、初めてドイツを訪れることができました。神様が創られた美しい自然を見ることができ、また同じ信仰を持つドイツの方々にお目にかかることができましたことは大きな喜びであり、感謝であります。

私は約20年前、教会に通い始めました。若いときから自分の醜さ、罪深さを知っており、その救いを必要としていました。また内科医として患者さんの病気や死を通して、人生の本質的なものを、絶対的なものを、真実なものを慕い求める気持ちが深くなっておりました。そして20年前、家内と長女と3人で洗礼に導かれました。毎週、礼拝に集い、メッセージを聞き、罪がすべて赦されていること、死後は天国が約束されていることを信じていましたが、今から振り返りますと、私の毎日の生活は自分で考え計画し、その歩みの中で生じた困難なこと自分の力の及ばないことはイエス様に祈り求める、というものでした。すなわち、自分の人生を決定するのは自分でした。そして私自身の傲慢な性格、自分が正しいとする性格を何一つ悔い改めることはありませんでした。が、それから6年後に家庭に一つの問題が与えられました。それは次男が心の病にかかったことです。

自分たちで子どもの病を治そうとする2年半にわたる、いろんな人間的な努力がすべて失敗し、自分たちの力に全く絶望したとき、私たちは子どもと共に今から10年前、吉祥寺キリスト集会に導かれました。そこで自分の傲慢な性格、自分を正しいとする性格を悔い改め、愛と憐れみをもってすべてを支配しておられる主の前にひれ伏しました。私たちは新しい喜びと希望とを持つようになりました。

それから10年たちますが、子どもは依然として弱さを抱えておりますが、主に拠(よ)り頼み、今は吉祥寺にあるドイツパンの店「リンデ」で働いております。

私は子どもの問題を通して、問題がなかったときよりはずっと多く主と交わることが必要でした。そして主をよく知ることができました。これは大いなる祝福であります。いろんなことを学びましたが、その中で最も大切なことは、私が人生の主人公ではなく、イエス様こそが中心となるべき方である、ということと、私は道に迷いやすい羊であり、羊飼いたる主に導かれるべきである、ということであります。そのことを多くの苦しみを通して学びました。そして、このような小さな者に向けられた主の愛と憐れみとを知ることができ、感謝し、主を崇めます。

(6月2日、アイドリンゲンで)



それは息子の問題ではなく、私の問題でした

奥　裕子

神奈川県茅ヶ崎から参りました奥裕子です。ドイツの地に主人と共に初めて来ることができました。ミヘルスベルグでの心からのもてなし、おいしい食事、感謝しております。

今から20年前、私はなぜか人生が不確かなものに見えて、不安でいっぱいになりました。優しい主人と可愛い元気な子どもたちとの生活で、何の問題もないと思っていた中でのことです。私は学生時代に少し教会に通ったこともあって、心の平安を求めて教会に通い始めました。4人目の次女が生まれたばかりで、主人に預けて行こうと願いましたが、主人も共に教会に行きたいということで、先に日曜学校に通っていた3人の子どもたちと教会に行き始めました。何も分からないまま、その年の暮れに滴礼の洗礼にあずかりました。ぼんやりとした信仰でしたが、家族6人が日曜日には教会で過ごすことが数年間続きました。

13年前、次男が18歳のとき突然、学校へ行けなくなり、悩み始めました。思春期特有のことと、しばらくはそっとしていました。それまでは彼は人一倍元気で、サッカーの得意なスポーツマンでした。その彼が毎日、ぼう然として机の前に悩んでいる姿を見ることは、私にとって初めての大きな試練でした。私たち夫婦は彼の悩みがどこから来ているのか、話しを聞き、解決すべく話し合うのですが、結果的には追い詰めていったようで、どんどん悪い状態になっていきました。

私たちにはどうすることもできない、と絶望の中で初めてイエス様に叫びました。そして、私たちには何もできないと分かったとき、この子をなんとしてもイエス様のところへ連れて行かなければならないと思いました。イエス様が言われている「**あなたの子をここに連れて来なさい。**」(**ルカ　9·41**)というみことばが、ひしひしと迫りました。

次男は悩み始めてからは、それまで行っていた教会にも行かれなくなって、主イエス様と出会えるところは、ここの教会にはないのであろうと、また祈りました。不思議にも同じ教会の友人からキリスト集会のことを紹介されました。ベックさんのメッセージのテープと、単行本の「光よあれ」を送ってくださいました。その2,3年前に実は、「光よあれ」の別の集(「光よあれ」は1集から9集まで出版されています)を読んでいたのですが、証しを書いておられる多くの方々の試練と強い信仰に、なまぬるい信仰の私はついていけないと思って、こともあろうにその本を処分していたのです。しかし、こんどはお一人お一人の証に、アーメン、アーメンと、本当に涙と共に感謝でした。またベックさんのメッセージに、苦しく辛い中なのですが、喜びのような不思議な涙が次から次へと溢れ出てきました。そして、初めてのように、みことばが生きて力となって心の中に飛び込んできました。それは「**わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。**」(**ヘブル　12·5**)というみことばでした。

次男の苦しみや悩みを通しての私自身のこの苦しみは、神様の罰ではない、と思えたことは、とてもうれしく、感謝でした。そして、イエス様は次男をベックさんと会わせてくださいました。当時、彼は家族以外の人と会うことはできませんでした。まして家庭集会のような大勢の人の中へ行くことなど不可能に思えていました。主が運んでくださったとしか思えない奇蹟の出来事でした。それから彼は少しずつ少しずつ心を開き、8ヵ月後に西軽井沢国際福音センターで、小学生だった次女、主人、私と共に4人で浸礼による洗礼の恵みにあずかりました。

その後の信仰の歩みも、日常的な歩みも決して元気で力強く、というものではありません。何度か倒れ、落ち込みました。相変わらず心は傷つきやすく、自分を見つめては落ち込み、なかなか社会的には適応していくのは難しい面を持っています。しかし、振り返ってみるとき、主が確実に彼を支え続けてくださり、導いてくださり、守り、愛し続けておられることを実感できます。笑顔が戻りましたし、何よりも共に祈ることができます。現在は吉祥寺のドイツパンのお店「リンデ」で、多くの方の支えと祈りによって少しずつ働かせていただいております。

次男の問題は、母親としての責任や痛みを感じながらも、私自身投げ出したくなるようなことも何度かありました。しかし、このことは私にとって必要なことであり、このことによってイエス様のところへ私は来られたのだと思っています。次男の問題と思っておりましたが、実はそれは私の問題であり、私こそイエス様のところに行かなければどうしようもない者であることを知らされました。ただただ主の憐れみに感謝です。自分の力ではどうにもできないことを通して、多くのことを教えていただきました。初めは息子が信仰によって元気で心身ともに強くなってもらいたいと、また信仰によってそうなると願っていました。でも今は、主は私に、弱さを持ったままの息子を受け入れなさい、と言っておられるように思います。主は弱さを通して完全に働かれるお方です。その弱さをそっくりイエス様のところへ持っていくだけだと思っております。

このキャンプの後、主人は東北の小さな町、水沢で働くことになり、家族があちこちに別れて暮らすことになりますが、このことも主からのことと受け止めて、主の導きの中を主人と共に歩んで生きたいと思います。

(5月31日、ミヘルスベルグで)





REJOICE

神が望まれたことは、病気の解明ではなかった

恩田正徳

米国のワシントンDCから参りました恩田正徳です。私は昨年10月より北米の電話礼拝に参加させていただいております。北米では、カナダを含めて約20ヵ所の家庭を電話回線でつないで、毎週日曜日に共にイエス様を賛美しています。

私は5年前から米国の国立がん研究所に勤務して、がんの研究をしています。それ以前は、日本で整形外科の医師をしておりました。私は、幼い子どもたちが骨肉腫というがんにかかって亡くなっていくのを目の当たりにして、なんとかしなければならない、と思っていました。いま思えば、なんという傲慢な考えであったか、と驚いています。当時の私は、自分が患者を治していると本気で考えていました。自分の技術により患者は治る、いわば自分が神であるかのような態度で治療をしていました。

聖書には「**知識は人を高ぶらせる**」（**1コリント　8・1**）とあります。医学という知識を手に入れたとき、患者の命は自分が責任を持たなければならない、という間違った責任感を持つようになります。なにがなんでも命を延ばそうとします。それが医師の仕事だと錯覚してしまうのです。骨肉腫の子どもたちが死んでいくのを見たとき、私はなんとかしなければならない、と本気で考えてしまいました。そのため私は大学院に行き、さらには米国に留学して、がんの研究を続けてきたのです。米国では研究に追われる毎日を過ごしてきました。家族との団欒の時間を削り、研究に時間を割くことを美徳のように思っていました。

しかし、研究を進めるにつれて、がんを治すことがいかに無謀なことかが分かってきました。医学の進歩は遅々としたものであり、とても一人の人間によってなし得るものではありません。医学の進歩のスピードは、私の人生の歩むスピードよりも、とてつもなく遅いものでした。医学の進歩は永遠に続くかもしれませんが、私の人生は永遠ではありません。　このことを考えると、私は言いようのない不安に包まれました。自分の人生の終わりを考えるとき、骨肉腫を治すという自分の目標を達成することができていないことは、容易に想像できました。私の人生とは何かと疑問を持ちながらも、日々の研究をストップして立ち止まって考えることもできず、また立ち止まる勇気も持てませんでした。

最終的な目標を持つことなく続ける人生は、とても辛いものでした。胸の中心に空洞があるように感じて、どんなに楽しいことがあっても、その胸の空洞は埋まらず、本気で楽しむことができませんでした。人生とは何かについて何年も悩みました。近くに牧師さんがいましたので、キリスト教に頼ろうと思ったこともありました。しかし、私はどんな宗教も信じる気になれませんでした。所詮、宗教は人間がつくったものであり、人間のつくった学問と同様にちっぽけなものでしかなかったからです。

人の一生は有限であり、神のもとでは人生はちっぽけなもので、ほんの一瞬に過ぎないと教えられました。しかし、自然科学を勉強してきた私には、神という立証のないものを素直に受け入れることはできませんでした。あるとき、信じられなければそのように祈るようアドバイスを受けました。そして私は次のように祈りました。「神様、私はあなたの存在を信じることができません。私に納得のいくように科学的にあなたの存在を示してください」数日後、私は科学で、つまり人間の理性をもって説明できないものが存在することを示されました。私の心の中で感じたのか、頭脳の中で感じたのかはっきりしませんでしたが、確かに神が存在していることを自覚したのです。それは人間には表現することのできないものであり、形があるわけではなく、人間の理性では知覚できないものでしたが、輝いているものであり、確かに存在していたのです。　**出エジプト記3章14節に「わたしは、『わたしはある。』という者である。」**とありますが、そのみことばのとおり確かにある、ということを示されたのです。私はこの啓示のような体験により、神を信じざるを得なくなりました。全知全能の神が生きており、その方のもとでは、人間はちっぽけなものであり、一人の人生なんて本当に小さなものでしかないことを自覚させられました。

神は一人の人間の地上での有限性を十分に承知しており、各々に相応しい役割をお与えになっていることを知りました。いままで自分が神になったように傲慢に仕事を進めてきましたが、神は私が研究を完成させて病気を治すようになることなど求めていないことが分かりました。たとえ私が一つの病気を治す方法を確立したとしても、人生には限りがあり、結局、人は死んでいきます。私が自分の人生をかけて努力してきた研究は、いずれ死ぬ者を、死ぬ時期を数年延ばすものでしかないのです。患者が死ぬという事実に対しては、なんの助けにもならないのです。

神が私に与えてくださった役割は、一つの病気を解明することではなく、もっと身近なことでした。神様が与えてくださった妻を愛し、同じく神様が与えてくださった子どもたちを愛し、次の世代へと神のみこころを伝えていくことだったのです。今まで家族の団欒を犠牲にして研究を続けてきましたが、それがいかに神のみこころに従っていないか、を思い知らされました。朝出かけて夜遅く帰り、家族と話をすることもなく、給料を稼いでいさえすれば、自分の役割は果たしていると思っていました。自分は社会のために働いているのだから、家族の犠牲は仕方がないと思っていました。自分中心の傲慢な態度をとっていたことに、自分であきれてしまいます。子どもたちと触れ合うことない生活を続けた結果、私の家族は、家族という名ばかりのものとなってしまいました。神はそんな罪の極地に達した私を憐れんでくださったのです。神が私に現れてくださったのは10月13日。私たち家族のために祈ってくださった方々の、お子さん同士が結婚した、ちょうどその日であったことを知り、びっくりしました。偶然の一致とは思えません。神のご計画の確かさと美しさを感じました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。 神のなさることは、すべて時にかなって美しい。
（伝道者の書　3・1、11）

神の存在を自覚したとき、私の心にあいていた空洞はふさがり、私は限りない平安に包まれました。この3月には家族でバンクーバーで洗礼を受けることができ、一家そろって神様の導きのままに喜んで生活しております。また神様は、来年3月にワシントンDCでよろこびの集いを開く恵みも与えてくださいました。主が祝福してくださるワシントンDCに皆さんがいらっしゃるのをお待ちしております。

（6月7日、ミヘルスベルグで）









REJOICE

とことん追い込まれて信仰へ

御任（みとう）　克彦

1948年大阪に生まれる（韓国人二世）。大江小、天王寺中、清水谷高校、東京歯科大学、同大学院卒業。歯学博士。歯科医。家族は妻佳子さん、長女愛花さん、長男一光（いっこう）さん、次男真言（しんげん）さん、次女流水（るつ）さん。

私は日本で生まれ育った韓国人二世で韓国名を“任”と言います。韓国人でありながら韓国語はまったく話せず、韓国の歴史や地理もよくわからないという複雑な立場の人間です。大学入学のとき事情で家族は帰化せざるを得なくなり、家族で名字を相談しました。その結果、異国である日本に住んでいても決して祖国韓国を忘れず、また祖先をいつまでも敬おうと、「任を大切に」の願いを込め、任の上に御をつけて「御任」と言う姓をつけました。私たち7人兄弟は親をとても大切にし、兄弟仲がよく、性格も温和で、勉強も7人ともまあまあでき、親戚の者が皆うらやむほどでした。両親は趣味や楽しみがまったくなく、自慢の子どもたちの成長だけを楽しみにし、将来の子や孫とのバラ色の生活を夢見て、仕事仕事に明け暮れる毎日でした。特に長男の私には両親の期待も大きく、私自身も親の意に沿い弟たちの手本になるべく、意識、無意識のうちに模範生として振る舞ってきました。つねにいい子、いい子でありました。

家族はずっと日本に住んでいましたが、私が6歳のとき1年ほど韓国にひきあげました。しかし韓国は住みにくく、ふたたび日本に帰ることになりました。しかし正規のルートではもう帰ることができませんでした。母は一人で、6歳から零歳の幼い4人の子を抱え、3、40人がぎっしりと詰め込まれた、天井もない6畳くらいの小さなポンポン船で、韓国から日本に密入国したのです。手をちょっと伸ばせば、すぐそこは海です。ひっくり返れば私たち5人はまず助からなかったでしょう。疲れと船酔いでゲェゲェ吐きながら何時間もかかって闇夜の博多の海岸にドーンと着きました。みんな大慌てで、母は子ども4人を引き連れ、追い立てられるように下船しました。忘れることもできません。私たちはクリスマス・イブで浮かれている寒い博多の町をはだしで歩いて逃げました。母は、小さな子どもを4人抱えて必死でした。命懸けの帰国でした。しかし私たちはすぐに捕まって収容所生活を送ることになり、裁判にかけられました。

私の家は小さいときはかなり貧乏で、オートバイ屋、ガム屋、風船屋，おもちゃ屋、養鶏業、建売業その他、本当にいろいろな商売をしてきました。子どもだけで留守番をしていたとき、裁判所の人が差し押さえに来たこともありました。その他にも随分といろいろなことがあり、私は長男だけにそんな経験や苦労をたくさん味わいました。両親の後ろ姿を見て成長した私は、ますます「御任の親や家族を第一」と考えるようになりました。

そんな私も年ごろになり、結婚のことが家族で話題に出るようになりました。両親は自分たちの目にかなう韓国人女性であれば誰でもいい、私の気持ちは二の次だ、と親戚の人などに、よく言っていました。このため、大学で現在の妻と知り合うようになったときは悩みに悩みました。でも、私の気持ちは変えられません。「結婚相手はこの人以外にはない」という思いは強くなる一方でした。当然両親は「相手が日本人」という一点で猛烈に反対し、半狂乱になりました。御任の家に日本人の血は決して混じってはならないのです。幼いときから「朝鮮人」であるという、そのことだけで辛いことやいやな思いを、いやというほど経験してきた両親です。理屈ではないのです。その反対たるや世間一般、並みの反対ではありません。すさまじいものでした。私は次第に家族の中で孤立していきました。そんな周りの猛反対の中を、親や兄弟に対して大きな罪悪感を抱きながら、結婚式も挙げられないまま、ふたりで生活を始めました。本来なら皆の祝福のうちに始まるはずの結婚生活。しかし、これが結婚生活のスタートだったのです。ふたりは何か悪いことでもしたかのように、ひっそりと肩を寄せ合うようにして暮らし始めました。

私は祈るとき、「愛する妻」とよく言います。これほど猛反対の大合唱の中をくぐり抜けてきた私たちです。どうして妻を大切に思わずにはおれましょうか。こんなにもすごい嵐の中を何の取り柄もない私についてきてくれた妻です。心の底から「愛する妻」と言わずにはおれません。

「人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」

（エペソ　5・31）

長女が3歳になったころ、妻はそれまで御任の家と没交渉でしたが、法事を機に御任の家にやっと出入りを許されました。でも、すでにイエス様への信仰をもっていた妻は、ほかの神を拝むことはできません。韓国では法事を特に大切にします。御任の家はまた大もめにもめました。これらのもめごとは、私にとってあまりにも苦しく、その解決法も見いだせないうちに、追い打ちをかけるように次々といろんなことが起こって、状況はさらに悪くなっていきました。

しかし、結婚や法事に関して、妥協の余地はありません。このことがはっきりとした時点で、親との争いを避けるため、妊娠8ヵ月の妻とともに私たち家族は身の回りの品を大急ぎでまとめ、家を出ました。私はそのとき「キリスト集会関係の所にだけは絶対に行かない」と強く拒否したのですが、そんな気持ちとはうらはらに、まるで見えない糸にでも引かれるように軽井沢の西軽井沢よろこびの集いに引き寄せられていました。福音センターに着いたとき、ベックさんは自分のことのように喜んでくださいました。またキリスト集会の人たちの心に直接触れて大きな平安を感じ、心の中に小さな灯がポッとともったような気がしました。ここには何かがある、きっと何かがある、と強く感じました。追い込まれて追い込まれて、もう主イエス様に助けを求めるしかない、というどん底の所に来て、私はやっと降参して主を受け入れました。強情で頑固な私は、とことん追い込まれ、これでもかこれでもか、と首根っこをつかまれるまでは、主を信じることができなかったのです。

その後、親に居場所がわからないようにアパートを何度も変え、「夜逃げの御任」と言われました。こっそり子供を転校させたりもしました。当時の私は仕事もなく無収入でした。はためにはさぞ大変に見えたでしょう。でもそんな状況の中で、私の心は逆にすごく満たされていました。

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

（2コリント　6・10）

そのころの私たちは経済的に苦しく、まわりの状況も最悪でしたが、主を信じた私は不思議にすべてのことが喜びへと変えられ、なんだかとても平安だったのです。愛する妻と3人の子たちとの生活はさながら「この世の小さな天国」とまで感じたほどでした。愛し合う二つの心が一つとなり、そこへさらにイエス様が介在してくださる。イエス様という同じ土台に立つ夫婦のすばらしさを心から実感しました。

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

（伝道者　4・12）

しかし、両親の気持ちを思うと、心が痛みます。私だけでなく、人生のすべてをかけて育ててきた6人の息子たち、生き甲斐であり宝であった6人全員が親のもとから逃げ去ってしまったのです。異国の地で誰のために何のために70年もがんばってきたのか。

彼は、夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた。

（マルコ　5・5）

これはまさに両親のことです。自分で自分の体を傷つけ、悲しみのあまりに泣き叫んでいます。身も心もボロボロになりそれこそ全身血だらけです。この両親に一日でも早く主を知って楽になってほしい、そう心から祈らずにはおれません。私は小さいころからいつも、



左から、克彦さん、次男 真言さん、長男 一光さん、長女 愛花さん、次女 流水さん、妻 佳子さん

両親に親孝行をしたいと思いながら、何一つ親孝行らしいことができませんでした。しかし私は「両親は必ず、主の救いにあずかれる。」というその日を大いに楽しみにし、わくわくして待っています。今御任の家は冬の時代です。きびしい寒さの真っただ中です。信仰がなかったら、この厳しい冬は永遠に続くと思ったでしょう。でも今は信仰をいただいています。この冬の後には必ず春が来ることをイエス様は、はっきりと約束してくださいました。きびしい冬が長ければ長いほど、それだけいっそう春の喜びも大きいでしょう。その喜びの春を想像すると今のこの冬の時代も毎日が希望の日々なのです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

このみことばが一日でも早く両親の心に届くことを日々祈っています。信仰を持つ前、私は仕事があまりにも忙しくて、自分は一生ひとの歯を削り、抜き、入れ歯を入れ、そして棺に片足を突っ込んだとき「ああ、自分の人生は本当に充実した一生であった。思い残すことはもう何もない！」と、自信をもって言い切れるかと想像したとき、急に不安になり、自分の人生や、自分の存在までもがだんだんと空しくなりました。しかし主を知った今「誰がこの自分に生命の息を吹き入れたのか。自分は何のために、また何の目的をもって生命を授けられたのか。人生における生きがいはとはいったい何か。」これらいろいろな疑問が、少しずつではありますが聖書を通してだんだんと明らかになってきました。

私のようなほんくらなキリスト者でも、主は大いに愛してくださいます。主の愛を痛いほどに感じます。運命だからと流されるままに人生をあきらめて歩む生き方と、主の計画された道を主からの大きな愛を感じながら一歩、また一歩としっかりと歩む生き方。このふたつの生き方にはなんと大きな違いがあるでしょう。イエス様に救っていただいたことを本当に心から感謝します。と同時に、イエス様のすばらしさを一人でも多くの方に知っていただきたいと心から願わずにはおれません。■

イエス様の恵みに感謝します

北原　雄司

1951年熊本県に生まれる。福岡県大牟田市立延命中、私立鹿児島ラサール高、京都大学法学部卒。財団法人・自治体衛星通信機構常務理事。前郵政事業庁四国郵政局長。家族は、妻隆子、長女真理子、長男寛司、次女めぐみの5人家族。両親は福岡県大牟田市在住。

私は今から11年前の1991年5月5日（日）に、イエス様を信じる者に変えられました。イエス様の救いを受け入れ、これからはイエス様に従って歩んで行こう、というはっきりした決断をしたのです。場所は軽井沢のバイブルキャンプの集会所でした。その日はとても素晴らしい天気で、イエス様に従う決心をした後、庭の緑の芝生の上で寝っころがって仰向けになりました。手足をいっぱいに伸ばし、暖かい太陽の日差しを身体いっぱいに受け、とても満たされた解放感でいっぱいでした。イエス様に救われるということは、こんなにも素晴らしいんだ、ということを初めて体験することができました。

何でも理屈が合わないと納得しない性質で、わがままいっぱいの私が、イエス様のことを信じられるようになったことは奇跡のような気がしますが、イエス様はいろんな方法でずーっと昔から私のことを導いていておられました。

私がイエス様のことを知った最初は、私が中学生のときです。母アサエはリウマチから来た心臓弁膜症で体が弱くてつらいことが多くありましたが、最後はイエス様に出会いました。私も教会やバイブルキャンプに両親と一緒に連れていってもらったことをよく覚えています。母は、私が20歳のときに42歳で天に召されましたが、葬儀は大牟田の自宅でキリスト教式で行われました。母の祈りは、いつも夫や子供たちの救いであったことを後で知りましたが、母が天国に行って20年後に私がイエス様に救われました。イエス様のご計画の素晴らしさに感謝でいっぱいです。

その後、私は29歳のときに現在の妻隆子と結婚しましたが、そのとき以来、妻の姉夫婦である笠井さんを通じて、イエス様が私たちの家庭にも関わってくださるようになりました。結婚してすぐになりますが、私の仕事の関係で1984年から87年までの3年間、家族全員で中東のヨルダンという国に住むことになりました。イスラエルの東側に位置しているアラブの国で、ヨルダン川がイスラエルとの国境になっています。私のもともとの勤務先は郵政省、すなわち現在の総務省ですが、アンマンにある日本国大使館勤務ということで外務省に出向して、にわか仕立ての外交官として行くことになったのです。

そんなとき、笠井さんの横浜の自宅で、ベックさんと初めて話し合う機会を備えていただきました。イエス様についてのお話の後、私たち夫婦はベックさんに導かれて一緒にお祈りをしましたが、私の方はつきあい程度で信仰を持つつもりは全くなく、そのときベックさんからいただいた聖書も、荷物になるからと笠井さんご夫妻に預けるような失礼をしてしまいました。

しかし、イエス様のご計画は素晴らしいものがあります。イスラム教国のヨルダンでたくさんの素晴らしいクリスチャンと知り合うようになったのです。特にお世話になったのがヨルダン人のフレディさんやイミールさんです。フレディは日本のヤマハで勉強されたピアノの調律師で、25歳ぐらいの、いわゆるボーン・アゲイン・クリスチャン（Born-again Christian：うわべだけのクリスチャンから、真に主に従う者へと霊的に生まれ変わったクリスチャン）です。車を運転しているときも、いつも賛美があふれ出てくるような素晴らしい若者でした。私が聖書に関心があると分かると、毎週のように遊びに来てくれてイエス様の話をしてくれました。自分の結婚式に呼んでくれたり、ヨルダンの現地の教会や兄弟の家に呼んでくれたり、イエス様を愛する人達というのは本当に素晴らしいな、ということを実感させられました。残念なのは私がその後救われたということをフレディさんたちがまだ知らないことです。いつかイエス様のご計画で再会できることを楽しみにしています。

私もそういうことで聖書を毎日のように読むようになりました。聖書は一体どんなことが書いてあるんだろうという興味本位でしたが、聖書のすべてが新鮮で、熱心に読みました。ベックさんからいただいた聖書は日本に置いてきましたが、なんとヨルダンでも日本語の聖書が売られているんですね。イエス様のなさることは本当に素晴らしい！

ヨルダンの低地で。隆子さん、長女 真理子さん、長男 寛司さんと

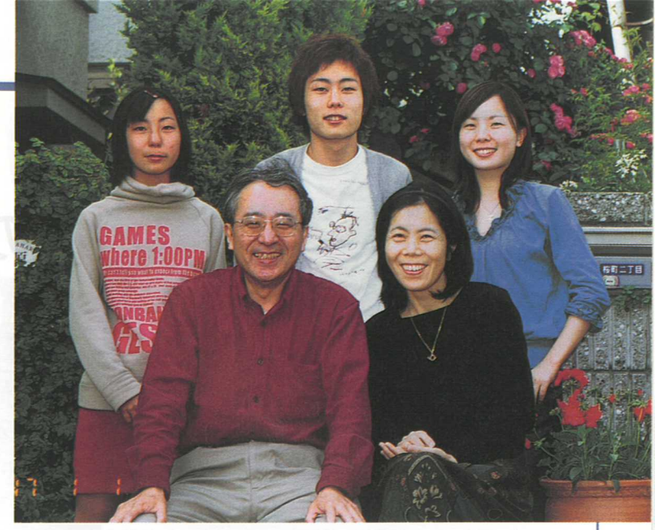


そうこうしているうちに、1年半が経ち日本に一時帰国することになりました。そのとき私にとって衝撃的な出来事が起きました。家内の洗礼です。1986年8月10日のことです。たまたま立ち寄った吉祥寺でのキリスト集会で洗礼式が行われていましたが、そのとき突然、妻から「イエス様に呼ばれている。今、洗礼を受けたいから承諾してください」という申し出がありました。私は強く反対し、なぜこんなことになってしまったのだろう、と落ち込んでしまいましたが、これもイエス様のご計画だったんですね。彼女は私のわがままについていけなくて相当悩んでいたことが後で分かりました。今はイエス様を中心に夫婦仲良く、先に彼女が救われたことについても感謝しています。

それから約1年後、3年間の海外勤務の任期も満了し、日本に帰国しました。勤務は名古屋で1年間、その後東京ということになりましたが、杉並の久我山に官舎が与えられましたので、吉祥寺のキリスト集会にも集うようになりました。毎週土曜日の家庭集会、日曜日の礼拝、福音集会と定期的に集うようになりますと、みことばがどんどん心にしみ込んできました。集会の皆さまとの楽しい語り合いも、懐かしい思い出です。また聖歌を賛美するとイエス様の愛に、いつも涙でした。しかし、心ではイエス様を受け入れているのに、洗礼を受けるということになると、まだ二の足を踏んでいました。そういった状況の中で1991年5月の軽井沢で開かれたバイブルキャンプに参加しました。2泊3日のキャンプでしたが、最終日の前の晩、布団の中で「イエス様。あなた様を救い主としてはっきり受け入れることができるようにしてください。」と祈りました。

そして次の日の朝、いつものとおり礼拝とベックさんのメッセージがありましたが、そのときはイエス様がこんな私にも聖霊をあふれんばかりに注いでくださいました。お祈りの一つ一つ、読まれるみことばの一節一節がアーメンでした。ベックさんのメッセージはヨハネの手紙第一からでしたが、私の心を大きく揺さぶり、身体が震え、頭を上げることができませんでした。イエス様が私の罪のために十字架にかかって血を流してくださったこと、私の罪はすべて光の中に明るみに出し、イエス様の救いをいただかなければならないことをイエス様に教えていただきました。イエス様の大きな愛、無償の愛、素晴らしい愛に、本当にただ涙、涙の連続で感謝するだけでした。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・5～9）



左から、次女 めぐみさん、雄司さん、長男 寛司さん、隆子さん、長女 真理子さん

このようにして、イエス様によって救われ、1991年5月26日、吉祥寺キリスト集会所でベックさんによって洗礼を受けることができました。感謝です。

それから11年。月日のたつのはあっという間です。イエス様は私の中にも住んでいてくださいますが、主の証し人としての生き方が十分にできず、イエス様ごめんなさい。イエス様は私たちが生まれつきの肉によって歩むのではなく、イエス様の新しいいのちによって歩むようにとおっしゃっていますが、まだ私は相変わらず自分の力に頼ったままです。イエス様にもっと頼れば、イエス様がもっと素晴らしいことをしてくださるのに、もったいない話ですね。悔い改めて、これからはイエス様との日々の交わりをもっと大切にして、イエス様の大きな恵みを楽しみ、いつも感謝し喜んで歩んでいきたいと思います。そしてイエス様にいつも助け導いていただきたいと思っています。

あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。

あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。（コロサイ 3・9、10、17）

なお、家族のことですが、長女真理子は都立北多摩看護学校の2年生、長男寛司は東京工大1年生、建築家志望です。次女めぐみは小金井1中の2年生、ヴァイオリンでメサイアのオーケストラに参加しています。各々自分の意志で受洗しましたが、今は主との結びつきを深め、喜んで主に従う者となるよう祈っています。

実家の方ですが、私の父俊雄、継母留美子、弟の俊英、鉄郎、英司はまだイエス様を受け入れていませんので、早く救われて欲しいと祈っています。

また、1997年2月に妻の父敏郎が腎臓ガンでなくなりましたが、イエス様を受け入れ平安のうちに喜んで天に召されていったことが、とてもうれしいです。妻の母幸子さんの救いも祈っています。 ■

再臨をテーマにした米映画

「バニッシュド」のメッセージのご紹介

「イエス様は再び来られる」と聖書で約束された「再臨」が来た時に、
地上で起こる波紋とその後の世界を描いた映画「バニッシュド（Vanished）」が米国で話題になっています。
「バニッシュド」とは、再臨の時に携挙によって空中に引き上げられ、
神の国に移されて地上から姿を消す信者たちのことを指しますが、
この映画は、その後にこの世に残された人々の苦難の日々ををを如実に描いています。
映画では、再臨後の混乱の中で、ジョン・ヘイギー氏（実在の人物・映画制作者の一人）が出て来て、
いろいろと解説し、起こっていることの意味を解明します。その説明が、再臨への心構え、
また未信者に福音をつたえる適切なメッセージになっていますので、
ご参考のためにその要旨を翻訳してご紹介いたします。
なお、この映画は、もちろんフィクションですから、実際の再臨後の世界が、
映画に描かれている通りになるわけではありませんが、同じようなことが起こる可能性はあります。
再臨後の世界の状況については、あくまで一つの参考とお考えください。

映画「バニッシュド」で語られているヘイギー氏のメッセージ

―― 映画の中で彼は、再臨、携挙後の混乱状況の画面に出て来て、地上に残された人々（＝映画を見ている人々＝未信者）に語りかけます。

私はジョン・ヘイギーです。再臨の時に携挙によってこの世から消え去った人々の中の一人です。私は聖書に書かれている再臨が必ず起こることを信じていましたし、わかっていました。ですから、この世に残された皆様に何が起こったのかをご説明し、地上に残された皆さんが重要な決心をなさる時のお役に立ちたいと思いました。今、皆さんは再臨という事態に遭遇し、恐怖と混乱の中で神経をすり減らし、特に愛する方々を見失われた方々は気も狂わんばかりかと思います。しかし、たとい愛する人が目の前から消え失せたとしても、どうか悲しまないでください。むしろ大いに喜んでください。この人たちは、今、すでに主イエス様のみもとに行っているからです。この世に残された人々は、多くのキリスト者たちが突然地上から消え失せたことについて、いろいろと説明を試みることでしょう。しかしこれは、私たちキリスト者が言う「携挙」なのです。聖書とイエス様を信じているキリスト者は、この時が来るのを信じて待っていました。その再臨が来たのです。私たちは主とともに永遠に過ごすために天の御国に引き上げられたのです。聖書は、この「再臨」が起こることを、あらかじめ預言していたのです。

―― 映画は携挙の後の地上の大混乱を描きます。その中で次のメッセージが語られます。

聖書には、再臨と携挙のことがはっきりと預言されています。だから主にある私たちは、この混乱が当然来ることを理解しています。しかし、この地上に残された人々は、いったいなぜ、このようなことが起こるのか理解できないでしょう。イエス様を受け入れ、信じ、従う人々が突如として天に迎えられます。その結果、この地上に残された人々が直面するのは、運転手がいなくなった車、パイロットがいなくなった航空機、消防士の不在、救助隊員や医師の不足などであり、この世の機能は大混乱に陥ります。電話、テレビ、ラジオ等の通信は麻痺状態になるでしょう。最も恐ろしいのは、人々が正気を失い、パニックに陥ることです。この地上に残された皆さんが直面する状況は、人間の想像を絶したものになることでしょう。

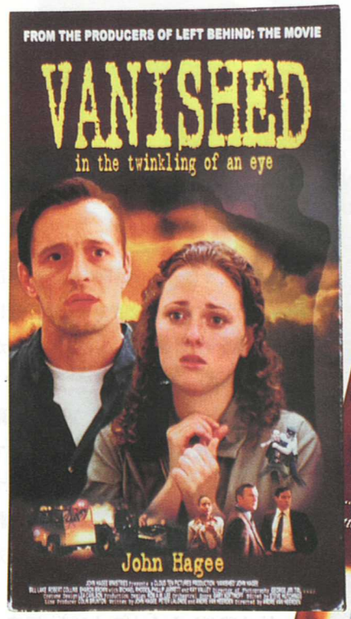
このようなパニックの中で、人々は必死にその原因や理由を追求し、いろいろな説明がなされます。中には宇宙人の侵略だ、とか、異次元への転移とか、もっともらしい説が飛び交い、人間の消滅を理屈づけようとするでしょう。いわゆる宗教家たちも、この論争に参加するでしょう。しかし、真の答えに到達することはできません。彼らは世界の混乱を、限られた人間の知恵で解明しようとあがくだけです。真実はただ一つ、「再臨」、つまりイエス様がご栄光のうちに来られ、主を信じる者たちを空中へ、御国へと引き上げてくださったという事実です。しかしながら、地上に残された人々は、この再臨の事実を決して認めようとはしないのです。

再臨後、やがて、混乱と憶測の渦巻く世界に、全ての答えを知っているかのような人物が現れます。この地上に残された皆さんは、この人物を見ると、直感的に「この人だ！　この人について行こう」と思わされることでしょう。その人物は、見るからに偉大な指導者に見え、この世に残された皆さんの目には救世主に見えるかもしれません。ところが、そうではないのです。彼は実は世界に類を見ない賢い詐欺師なのです。世界中の人々に友人のように語りかけ、人々の信念や主義主張を支持し、団結と平和を説き、そのさわやかな弁舌は世界中を魅了するでしょう。人々はこの人物に希望を置き、世界の理想が現実になっていくことに夢中になるでしょう。やがて彼は精神的、経済的、政治的な「世界の指導者」となり、国家間の争いは消え、宗教の違いによる民族の対立も消え、全ての国の人々が、新しい世界の指導者に従って行くでしょう。彼こそはまさにその時代の救世主であり、知恵と力の超人と思われるでしょう。しかし本当は、彼は救世主どころか、羊の毛をまとった狼なのです。聖書が語る「反キリスト」そのものなのです。彼は独自の方法で人々をまどわし、味方につけ、この地上に残された皆さんの魂を奪い去るのです。残された皆さん、彼を信じてはいけません。彼は救世主などではなくて、世界を流血に巻き込む悪魔の化身です。彼は政治的には世界制覇を達成しますが、真の目的は、全世界をあざむき、皆さんの魂を滅びに至らせることなのです。彼が提唱する公約は、一見、どれもが心地よいものですが、実は賢明に仕組まれた滅びへの道です。彼は暗闇の支配者、サタンです。耳を貸してはなりません。彼の側に立つ者の言う事も聞いてはなりません。この地上に残された皆さんがこれらの巧みな誘惑に抵抗するためには、今までに経験したことのないような大きな勇気と力が必要になるでしょう。このサタン、世界的指導者が世界の表舞台に登場すると、この地上に残された皆さんにはすぐに彼だとわかるはずです。この人物はヨーロッパから出現し、和平条約を締結することにより狡猾に世界を支配するでしょう。まず、イスラエルに和平を実現し、彼が平和の人であることを全世界にアピールします。ユダヤ人もこの和平条約を歓迎します。ユダヤ人は、彼こそが救世主だと信じてしまいます。イエス様は、かつてイスラエルの子孫であるユダヤ人に対して警告をなさいました。**「わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。」**（ヨハネ 5･43）と。イスラエルとアラブ諸国の和平条約締結に成功した彼は、世界中の信頼をかちえます。世界の人々は、彼が単に政治的指導者であるだけでなく、この世のあらゆる問題を解決してくれる人だと信じこみます。

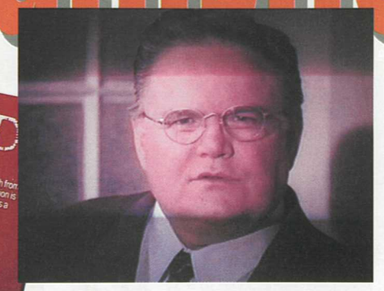
やがて彼は、本性を現わし、世界中を人々の血で染めるでしょう。さらに彼は、「キリストは詐欺師」だと言い、「キリストを信じる者は恐ろしい間違いをしている」と言うことでしょう。彼を信じてはいけません。皆さんの魂の救いがかかっているのです。彼のような者を信じることは、自らに永遠の破滅を招くことになります。彼の巧みな誘いかけや偉大な約束を拒否することは非常に困難でしょう。残された皆さんは、きっと善悪の違いさえも分からなくなるでしょう。

このように、携挙のときに地上に残された皆さんは、大きな患難の時代に生きることになります。それは、欺瞞、欺き、裏切りの日々であり、かってない暗黒の時代です。再臨が来るまでは、キリスト者のうちに住んでおられた聖霊が、サタンの攻撃に対して守ってくださいました。しかし今や、主のみもとに行ってしまいこの世から消え去った人々とともに、聖霊の臨在も無くなったのです。しかし、イエス様の福音をまだ聞いたことのない方々には、希望が残されています。この時代の中にあって、あなたは、神の側に立つ決心をすることができるのです。この時代は悪魔の時代です。ですから携挙の真実は覆い隠され、新しい指導者、反キリストの実態も隠されています。生きるまことの神に関するあらゆる真実が全て隠されてしまうのです。

全世界を支配下に置いた反キリストは、あらゆる技術を駆使して計画を遂行します。







Vanished

彼はマスメディア、情報、コンピュータのすべての分野を手にいれます。世界の軍事力のすべてが彼の支配下に置かれます。

生活の末端までもが監視され、サタンが見張り人となります。このように、全権力を掌握した反キリストは、全ての人々が忠誠を誓わざるをえないような制度を作ります。人々は手や額に刻印を押され、この印がなければ、買うことも売ることもできなくなる、と聖書に書かれてあります。しかし大切なのは、売買、つまり経済の問題ではありません。もっとも大切なのは、人間が誰に仕えるのか、まことの神、主に仕えるか、サタンに仕えるかです。旧約時代のヨシュアもそうでしたが、この世に残された皆さんも、誰に仕えるかという選択を迫られます。そして、まことの神、主を選ぶとき、皆さんは暗黒の支配者、反キリストに対立することになるのです。**「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、主に仕えなさい。もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える。」**(ヨシュア24・14, 15)

再臨の後の時代に、イエス・キリストを信じる選択した人々は、その信仰のゆえにきびしい迫害を受けます。反キリストは自分に従わない者を抹殺し、誰が見てもそれが正しいことのように見せかけます。サタンに反対する人々の方が、偏狭な国家の敵であると見なさます。しかし、騙されないでください。これらは全て表面上のことにすぎません。大切なのは、「人間の永遠の救い」です。たとい全世界がキリストに反対しても、あなたは決して反対してはいけません。神は残された人々の中にも、福音を伝える人々を置かれました。皆さんはこの人々の声を聞いてください。そして、彼らに導かれる者となってください。

この映画を見ている、イエス様をまだご存知ない方々へ!

── そしてヘイギー氏は、映画をご覧になっている、イエス様をまだご存知ない方々に、次のように呼びかけています。

イエス様をご存知ない方々、まことの神、主は、あなたのために、すばらしい計画を用意し、あなたのために道を備えられておられます。皆さん、再臨、携挙が来れば、誰が天に引き上げられるかご存知でしょうか。まず、「主イエス様を受け入れ、信じ、従う人々」のうち、すでに召された人々が上げられ、続いてまだ生きているキリスト者が上げられるのです。イエス様を否んだ人々は、その時、イエス様に招かれず、地上に残されるのです。今、あなたは、この映画をご覧になっています。あなたは、「再臨なんてまだ先のことだから、今すぐイエス様に仕える決心をしなくてもいいだろう。その時になってからでもいい」と考えられるかもしれません。しかしそれは、いい決断だとは言えません。明日、いのちがあるかどうか、いったい誰にわかるでしょう。人間は、次の瞬間、息があるかどうかさえわからないような存在です。聖書が『明日のことを誇るな。一日のうちに何が起こるか、あなたは知らないからだ。(箴言27・1)』と言っているとおりです。もし、今日あなたがイエス様のこと、十字架のこと、救いのこと、福音のことを聞き、それでもあいまいな態度をとって拒否するなら、主の再臨の時、携挙の時に、あなたはイエス様のみもとに、天に上ることなく、この地上に残されてしまいます。そして、あなたが出会うのは、大いなる苦しみの日々、反キリストの欺きの時代です。今は救いの日、今は主の恵みの時です。今こそが決心すべき時です。聖書は今日、「あなたが誰に仕えるかを選びなさい」と言っています。快楽に満ちた今の時代、主イエス様に従わないほうが都合がいい、と思われる理由はたくさんあるでしょう。しかし、それらはみな、むなしいものです。どうか、イエス様がくださるすばらしい救いと恵み、御国にある永遠のいのちのことを考えてください。今、この時の選択が、あなたの将来を決定するのです。主イエス様のすばらしいご栄光にあずかるために、そして、主イエス様を信じる者だけがいただける永遠のいのちの道を、どうか選んでください。一瞬たりとも遅れる事なく、今、決心してください。そして、あなたの人生を、イエス様に捧げてください。主イエス様だけが、あなたを救うことがおできになるのです。

＊　＊　＊　＊　＊

ヘイギー氏は聖職者で、1975年にダイアナ夫人と共に米国テキサス州サンアントニオに教会を創設した時、教会員はわずか25人でしたが、現在は1万5,000人を超えています。ベストセラーになった「The Beginning of the End(終わりの始まり)」をはじめとする多くの著書や、テレビ放送でも知られています。



各地の集会から

from FUKUOKA

こちら福岡集会で〜す

こんにちは。こちら福岡集会です。ときどき参加する方も数えますと80人を超える大所帯ですが、ふだん日曜礼拝に出てくる人数は50人前後です。このうち、夫妻で集っている人は16組32人、家族で信仰を持っている人が多い、ということが私たちの集会の特徴ではないか、と思います。それと、家庭集会が10ヵ所で持たれている、それだけの家庭が集いの場を提供してくださっている、ということも感謝です。

礼拝とそれに続く福音集会の後は、持ち寄りで食事を共にし、語らいの時を過ごします。女性たちが食事の準備をしている間、男性たちは別室で、短い祈り会を持ちます。そして、昨年は食事の後、有志で合唱の練習をしていました。今年もこの雑誌が発行される頃には、練習を再開していることと思います。曲はもちろん、ヘンデルのメサイアです。(ハイドンの天地創造は、32人が楽譜を購入しましたが、まだ個人で練習するだけにとどまっています)

素人ばかりの練習でしたけれども、イエス様の憐れみでしょうか、昨年7月22日に福岡市西市民センターでメサイア全曲のコンサートを開く恵みにあずかりました。とくに嬉しかったのは、出演しない方々が献身的に協力してくださったことです。

こう書きますと、よいことずくめのように思われるかもしれませんが、残念なこともあります。若い人が少ないこともその一つ。そのためもあって、子ども集会は開いたり開かなかったり、の状態です。

ときに、集会内に渦が起こされることもありますが、イエス様から与えられる必要な試練かもしれませんね。なんの波風も立たない仲良しクラブ的な集会よりは、問題が起き、それによって一人ひとりが砕かれ、悔い改めに導かれるなら、それもまた恵みではないか、と思ったりしています。

ここで少し昔の話をしますと、福岡県にキリスト集会が芽生えたのは昭和60年(1985年)、大牟田市の須崎和子さんのお宅でした。「その前年、私は吉祥寺キリスト集会所で洗礼に授かったのですが、ベックさんに集会を持ちなさいと言われて、右往左往しながら近所の人に集まっていただいて開いたのが最初です」と須崎さん。それから17年。この間、会場を大牟田市から福岡市の家へ、さらにいくつかの公共施設を転々として約5年前、現在の場所に落ち着きました。

今の会場は駅に近く、たっぷりの駐車スペース、冷暖房完備、大きい窓ガラスの明るい部屋が与えられて、言うことなし、です。これほど恵まれた会場を使っている集会は他にないのではないかと、つい自慢したくなるほどです。

福岡を訪れる際には、どうぞ連絡してください(この雑誌の「キリスト集会のご案内」に掲載されている福岡県在住者にお電話を)。日曜日の礼拝と福音集会のほか、土曜日にも一週おきに家庭集会を開いていますので、ぜひお立ち寄りください。礼拝は北九州でも月に一度、持たれています。(山口裕之)









あおぞらひろば

“あおぞらひろば”も、ぶじ、3かいめをむかえることができました。
みなさまから、あたたかいエピソードをおよせいただき、かんしゃしています。
また、そのなかから、いくつかを、ごしょうかいしたいとおもいます。

ぺちゃんこになった おにいさん

あるおにいさんからうかがった、おはなし。

10ねん以上もまえの、子どもキャンプのおもいでです。

キャンプもおわり、あとは帰るだけとなったとき、問題がおこりました。

ひとりの男の子が、おとなの人から、

「ゲームボーイのカセット、ぬすんだでしょう!」

と、いわれていたのです。

その子は

「ぼくじゃない!」

と、いいました。でもおにいさんは、こころのなかで、その子のことをうたがっていました。カセットはちいさくて、高くて、子どもにとって、みりょくてきなものに、思えたからです。

やっと3日間のたいへんなキャンプがおわり、はやくうちにかえりたい。そんなふうに、じぶんのことだけかんがえていたそうです。

(こんなことが日曜学校のキャンプでおこっていいのか。しかも、じぶんめのまえで。)

と思っていたけれども。あの子のことを、もっとしんぱいすべきだった。と、あとになっておにいさんはいいました。

いろいろ探してみましが、みつかりません。ふとんが山のようにつまれていたへやは、もうかたづいていました。ところが、ふとんをひきずりだしてさがしているうちに、そのなかから、なくなったカセットがでてきたのです。こうして、カセットをかえすことができたのです。

うたがわれた男の子のめいよも、かいふくされました。

ふとんをもとどおりにかたづけ、キャンプ場出口にもどったとき、ちょうど、ほかのみんなも帰るところでした。イエスさまのご計画は、かんぺきだったのです。

じっくり　しりあう

全国からおともだちが集まる子どもキャンプでは、もじもじしていた子たちも、だんだんうちとけていきます。夜だってなかなか、目をとじることができません。やみの中で

ヒソヒソ、クスクス。

「こら〜!もうねなさい!」

しーん。

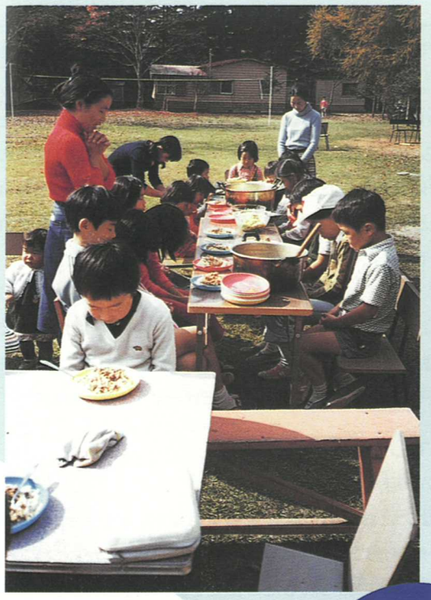
そして、またしばらくすると、ごそごそごそ。

まいとし、こんな光景がくりかえされます。みんなをしかるのには、理由もあります。ちいさい子たちはねぶそくだと、えんそくのバスに酔ってしまうし、けがもしやすくなるからです。

けれど、みじかい時間を惜しんで深く話したいという気持ちは、おとなもこどもも同じようです。

夜のひそひそ話の中で、この子にこんなやみが、と、おどろくようなお話をきけて、いっしょにおいのりすることができたりもするんだよ、と、あるおねえさんが話してくれました。きまりごとだけではとらえきれない、イエスさまのやさしいおはたらきを、かんじることができます。

それでも、安全・健康がだいいち。これからも、あるじかんを超えたら、かみなりバアサンになることも必要だよね!と、わらいあいました。









イエスさまと、おはなししたの

日曜学校にきているAちゃんは、どくしょがだいすき。あるとき、戦争中にかかれた『アンネの日記』という本をよんでいました。

アンネは、ユダヤじんです。

そのころ、ユダヤじんはみんな、ころしてしまえ!という、まちがったかんがえが、よのなかを支配していました。

アンネとそのかぞくは、ころされないように、こっそり隠れてすんでいました。

ところが、やがて、アンネたちも、わるいおとなにみつかってしまいます。

このあたりまで、よむうちに、Aちゃんはだんだん、こわくなってきました。

「どうして、こんなことがあるの!?」

「イエスさま、いなかったの!?」

と、おかあさんに、しつもんするようになりました。

おかあさんも、こまってしまいました。アンネの日記は、つくり話ではありません。じっさいにおこった歴史から目をそらしてしまってよいのか、おかあさんにもわからなかったのです。

「こわいです。」

「わかりません。」

「たすけてください。」

と、ふたりでおいのりしました。

するとあるひのこと、Aちゃんの夢のなかに、イエスさまがいらしてくださったのです。イエスさまはAちゃんを、やさしくおひざのうえにすわらせてくださいました。そして、じっとめをみつめながら、おはなしをきいてくださったのです。

こわかったことを、ぜんぶ、おはなしすると、イエスさまはやさしく、

「こわかったら、もう、よまなくてもいいでしょう?」

と、おっしゃったそうです。

それっきりAちゃんは、こころからあんしんしてしまったのです。

「もう、よむのやめたの。せいしょをよめば、いいんだって。だからもう、こわくないんだ!」

と、はなしてくれたAちゃん。ピカピカかがやいて、ほんとうに、まぶしかった。

主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。
(詩篇　91・4)

たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存知だからです。
(1ヨハネ　3・20)

子どもたちの写真やエピソード、お待ちしてます!!

各地で日曜学校のお世話をされている方々、また子育て奮闘中の皆様からの原稿をお待ちしています。(子どものプライバシー保護の意味合いも含めて、基本的に執筆者、エピソード提供者の名前は載せません。)子どもたちの、ふとしたつぶやきから教えられたこと、ドキッとさせられたこと、思わず吹き出してしまうような、ユーモラスなエピソードなど、お寄せください。なお、紙面の都合上、編集して一部を掲載させていただくこと、全員分をご紹介できないこともありますが、ご了承ください。

送付先　181-0005　三鷹市中原3-1-55　清水洋一
e-mail :yoichi-s@par.odn.ne.jp

五旬節って何の日？

五旬節は、旧約聖書の時代には「七週の祭り」（申命記　16･10）と呼ばれ、「過ぎ越し」のあと種無しパンを食べ、大麦の初穂を捧げてから七週間後（50日目）の祭りのことでした。現代では、新約聖書の使徒の働き1、2章の記述に基づいて、イエス様が昇天された後の五旬節の日に、主が約束された通りに聖霊が下ってこられたことを記念する大切な日になっています。

その日、聖霊が下ってきた！

聖霊が下ってきた状況は、使徒の働き1章から2章にかけて記されています。

イエス様は十字架につけられ、葬られ、3日の後によみがえり、40日の間お弟子たちに現われて神の国のことを語られました。そして次のように命じられました。

「わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」　**（使徒 1･4, 5）**

続いて次のように言われました。

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。　**（使徒 1･8,9）**

五旬節の日になって、みなが一つの所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。　**（使徒 2･1-4）**

これが主のお約束通り、聖霊がこの地上に下ってこられた状況です。聖霊の降臨は、この時ただ1回きりのできごとで、以後イエス様を信じた者は、その時から必ず聖霊をいただけるようになったのです。

聖霊とは何でしょう？

イエス様は次のように言っておられます。

「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」　**（ヨハネ　14･16,17）**

聖霊は、父なる神、子なるイエス･キリストとともに三位一体をなしています。キリストにある新生を経験した人は、誰でも、キリストの御霊（聖霊）を持っています。新生と聖霊のバプテスマは一つのものであり、共に一回限りの経験です。

キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。　**（ローマ 8･9）**

キリストの霊を持っている人がキリストのものであり、キリストにつながっているのです。聖霊は、力や影響力、祝福というようなものとは本質的に異なります。聖霊は、父なる神や子なるイエス･キリストと同じような、「人格的な存在」です。人間は聖霊を自分の意のままにすることなどできません。聖霊ご自身こそが人間を自由にお用いになろうとしておられるのです。

たいへん危険な「異言」と「いやし」の教会

教会の中には、聖霊の降臨を使徒の働きに記された通りの一度きりのできごととせず、現代にあっても、ことあるごとに主に熱狂的に願い、その結果得られたと錯覚する一種独特の異常体験を「聖霊によるバプテスマ」と称し、その証拠（しるし）は「異言」を語ることだ、とする誤った教派があります。いわゆる「異言」と「いやし」を行なう教会がそれであり、大変危険な存在です。聖書のどこを見ても、私たちがこういった誤った聖霊のバプテスマを求めるべきだとは書いてありません。聖霊はイエス様を信じたとき、私たちに一人の例外もなく必ず与えられるものであり、それは一度きりで完結し、永遠です。キリスト者が聖霊に満たされるのは、力やしるし、いやしなどを神に強要したり、特別の体験をすることによってではありません。主イエスのご支配に自分をゆだねることによってです。主イエスは私たちを豊かに祝福し、用いたいと望んでおられます。しかしそれは、主イエスが私たちに異言の賜物を与えたり、いやしの奇跡のしるしを与えることによってではありません。私たちを十字架のみもとに導くことによってです。

終わりの時代の特徴は、「惑わし」です。私たちはこのような誤った「異言」「いやし」の教会に注意し、警戒しなければなりません。五旬節にあたって、私たちはよくこのことを考えておきましょう。（なお、「異言」と「いやし」の危険性については、ベックさんの「実を結ぶ命」第3部にくわしく書かれています。ぜひお読みください。）

今、何よりたいせつなのは、絶えず聖霊に満たされることです。聖霊に支配されることです。それによって、聖霊の実は自ずから明らかになります。

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。　**（エペソ 6･18）**

五旬節

降り注ぐ光のシャワー

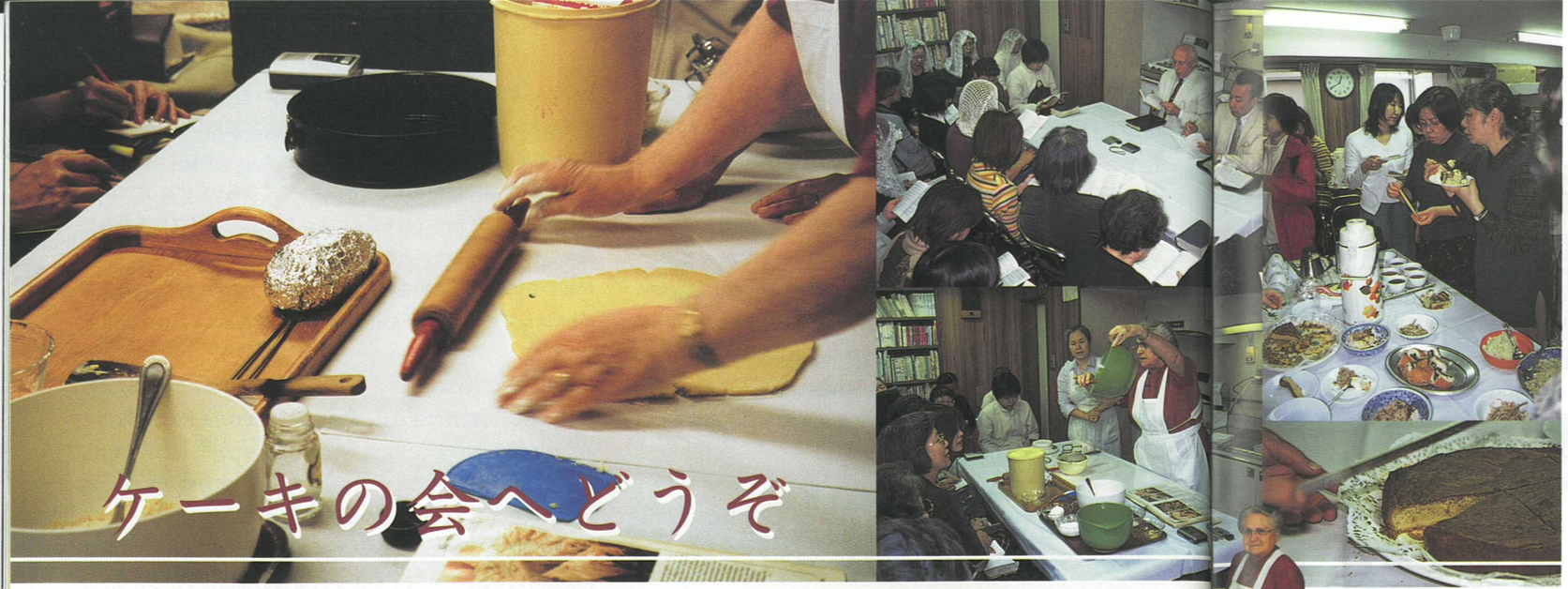
春から初夏にかかる五旬節のころ、日没後の星座で目立つのは獅子座です。南天にきらめく一等星レグルスと周囲の星々の配列からは、容易に獅子の姿を連想できます。その点で覚えやすく、親しみやすい星座です。

獅子座といえば、昨年11月19日未明に、過去200年で最大という流星群が出現して話題になりました。この流星群は、33年で太陽を1周するテンペル･タットル彗星からの贈り物です。

一般に彗星は、その通り道（軌道）に沿ってチリ（塵）をまき散らし、チリの帯を形成しています。このため、年に一度、地球がその帯を横切るたびに、たくさんのチリを浴びることになります。地球の大気圏に突入したチリは、摩擦熱で燃えて光を放ち、流れ星として観察されます。チリの帯には濃いところと薄いところがあり、チリの群れも太陽を周回していますので、たまたま濃いところと出くわすと流星群の大出現となるわけです。

昨年の大出現は、英国の天文学者（D･アッシャ博士）によって事前に予告されたため、多くの天文ファンが壮観な流星雨を楽しむことができました。今年も11月19日にかなりの流星群が降りそうですが、残念ながら日本では見られません。今回はカナダのハドソン湾北部あたりが最適の観察場所で、夜明け前、東の空に昇ってくる獅子座の方向から流星はやってきます。

五旬節の日とは重なりませんが、降り注ぐ獅子座流星群の光のシャワーに合わせて、2000年前の初代教会の人たちに注がれた聖霊について思いをめぐらせてみてはいかがでしょうか。



ケーキの会へどうぞ







毎月第3または第4木曜日の午前、
吉祥寺キリスト集会所の2階は料理教室に変容します。
ケーキの会が持たれるためです。
お菓子づくりの実演を見たり、聖書のみことばを聴いたり、
焼きたてのケーキを賞味したり、という参加自由、入場無料の
楽しい集いです。今年4月28日の会から、その模様を紹介しましょう。

会は定刻を10分過ぎた午前10時40分、「お早うございます」の挨拶で始まりました。約50の椅子を敷き詰めた部屋はほぼ満席。前方にレシピを書いた紙が掲示され、テーブルには調理器具と食材が並んでいます。



「きょうは、マザリントルテというスウェーデンのケーキです。材料を申し上げますと、バター150g、砂糖40g、バニラスティック1本、塩少々、卵黄2個分、小麦粉200g。以上が台の分です。次に中に入れるフィリングの材料は、バター125g、パウダーシュガー125g、卵2個、アーモンド粉125g、レモン1個、小麦粉20g。焼き温度180度、焼き時間45分。26cmの丸型です」

ひとあたりの説明が終わると、すぐ調理にかかりました。お手本を示してくださるのはミンヘン・ベックさん。ゴットホルド・ベック宣教師の奥さんで、「ベックさんのドイツ菓子」（婦人の友社刊）の著書もあるケーキづくりの熟達者です。

ボウルに小麦粉や砂糖、卵などを入れてこね回す、といった作業が、短い説明を時折はさみながら手際よく進められていきます。参加者の中には熱心にメモをとる方もいます。「このケーキ、本当に簡単ですよ」と調理の手を動かしながらミンヘンさん。その言葉どおり、作業は20分ほどで終わり、あとは焼くだけになりました。ここまでが会の前半で、5分ほどの休憩の後、後半の部へ。

こんどはゴットホルド・ベック宣教師の聖書のお話です。この日ベックさんは、新約聖書のヨハネ伝10章から、次のようなイエス様の言葉を引用されました。

「わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」

これらのみことばは、イエス様がご自身について証しされたものですが、そのことを踏まえてベックさんは、



1. 人間は罪滅ぼしのために何もできないから、イエス様が代わりに死んでくださった、
2. イエス様の愛は条件付きではない、
3. なんでもできる方（イエス様）から愛されているなら、もう心配することはない……などと、

イエス様の愛やイエス様からいただく恵みについて、やさしく解き明かしてくださいました。



お話が小1時間で終わると、最後は食べる番。焼きたてのケーキを小さく切り分けていただきます。この日はケーキにチャーハンも添えられて、みなさん大満足の様子でした。

この会が始まったのは1967年、以来35年間、毎回違うケーキを作ってきましたから、その種類は400を超えます。「近ごろは、今度は何にしようかと考え込むこともあります」とミンヘンさん。

ケーキの会は吉祥寺集会所のほか、東京近辺の家庭でも行われています。そして、ひところは八王子、滝山、二ノ宮、井の頭などと場所を変えて毎週のように開かれましたが、最近は月に2回くらいの割合で持たれています。

だれでも気軽に参加できる会ですので、みなさんぜひお出でください。キリスト集会に行ってみたい、と思いながらも、なかなか足が向かない、というような方は、“足慣らし”のつもりで来られたらいかがでしょうか。28日の会には、「集会は初めて」という方が6人いらっしゃいました。なお、ケーキの会は7～8月はお休みです。



Schwedische Mazarintorte

マザリントルテの作り方

材料（26cmの丸型）

台　バター　150g
　　砂糖　40g
　　バニラスティック 1本
　　塩　少々
　　卵黄　2個分
　　小麦粉　200g

フィリング　バター　125g
　　粉砂糖　125g
　　全卵　2個
　　アーモンド粉 125g
　　レモン皮　1個分
　　小麦粉　20g

焼き温度180度
焼き時間45分。

◇ 台を作る

1. やわらかくなったバターに砂糖、卵黄、バニラを加えて混ぜる。
バニラはスティックからスプーンやナイフなどで中身を取り出して加える。



2. そこへ、ふるいにかけた小麦粉と塩少々を加えて混ぜ、全体をこねてひとつにまとめる。



3. アルミホイルに包んで冷蔵庫で2時間ほど寝かせる。
（バターが多いので、のばす時にベタベタするのをおさえるため）





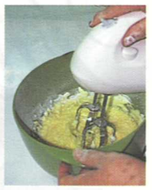
4. 粉を打ちながら生地を麺棒でのばし、ケーキ型の底から側面に敷いて、余分なところは切り、型の半分くらいの高さに整える。





◇ フィリングを作る

5. バターに粉砂糖と黄卵を加え、ハンドミキサーで混ぜる。
（粉砂糖が飛び散るので注意）



6. すりおろしたレモンの皮を加え、アーモンド粉をひとさじずつ加えて混ぜ、さらに小麦粉も加えて混ぜる。



◇ 型にフィリングを入れて焼く

7. 生地を敷いた型にフィリングを入れ、スプーンやヘラで平らにする。





8. 180度のオーブンで45分焼く。

信仰は望んでいる事がらを保証し、
目に見えないものを確信させるものです。
（ヘブル11・1）

Wedding
結婚式

01/14
畠山 俊・花苗



02/11
赤野間 美光・貴子



03/21
松井 裕一・友美子



04/20
前山 忠陽・直美





04/21
小川 健夫・梢



04/27
平山 慎太郎・美紀



05/05
松下 明文・たまき



05/06
大矢 泰士・寵子



05/18
高橋 淳・綾子

結婚・葬儀のご報告

罪から来る報酬は死です。
しかし、神の下さる賜物は、
私たちの主キリスト・イエスにある
永遠のいのちです。（ローマ6・23）



Funeral
葬儀







11/12　金久 信義
01/07　国見 正直
01/12　庄野 尚
02/20　石村 房之助
03/11　金本 清彦
04/11　後藤 さら
05/07　中島 暁男

駐車場が欲しいよう

5月のゴールデンウィークに開かれた、西軽井沢国際福音センターよろこびの集いは、コンサートに二つの結婚式、記念会などが重なり、献堂式（1992年）以来のにぎわいになりました。ゲストハウスに面した駐車場（44台収容）、会堂脇の駐車場（44台収容）、草原のスペース（約60台収容）はすべて満杯。やむなく構内の路上、浅間サンライン沿いの公園などに駐車した車が40台余り。「おそらく200台近く来たのでは？10年前の献堂式のときの283台に次ぐ記録です」とセンター管理者の羽石真二さん。

百貨店が開けそうです

西軽井沢国際福音センターのよろこびの集いで、いつも驚かされるのは忘れ物の数と種類の多いこと。傘、ボールペン、ノートブック、手帳、スリッパ、ズボン、背広の上下、背広ケース、セーター、靴下、下着、靴、洗面用具、時計、テレホンカード、電池、おもちゃ、カメラ、ボストンバッグ、ハンドバック、財布、鍵（かぎ）、聖書、聖歌集、ベール、老眼鏡、寝袋、紙オムツ、タオル……。日用品は全部そろう、と言えるほどです。センターでは「キャンプ後2日間は忘れ物の問い合わせと発送に追われる」そうです。お帰りの際は所持品の点検を。

キリスト集会のご案内

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、
主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、
主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名です。
だれがいくらささげたかは主のみがご存じです。

日曜日の礼拝では、祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

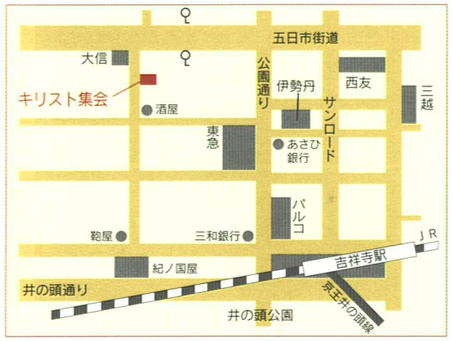
家庭集会は、家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

「よろこびの集い」は、西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

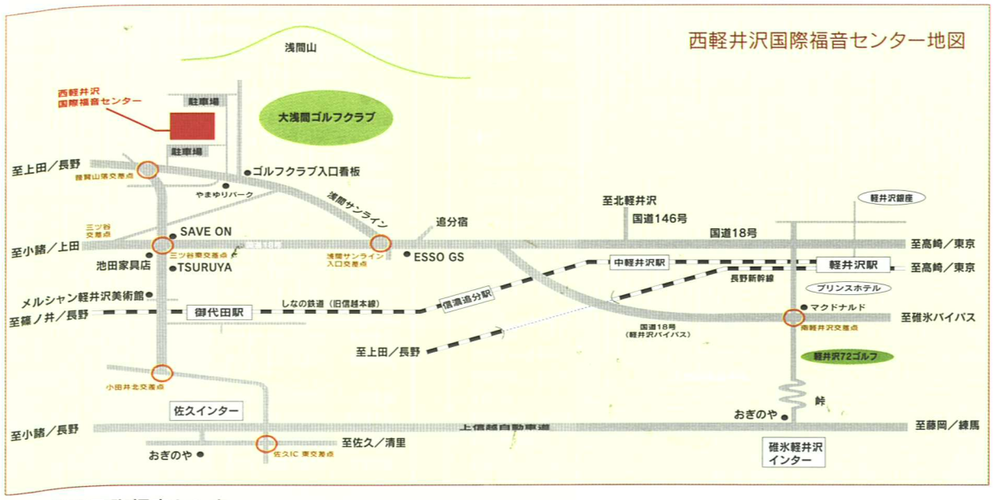
吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11 〒180-0004
［電話］ 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝	10:30／14:00／19:00
日曜福音集会	12:00／15:00／20:00
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:30
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00

吉祥寺キリスト集会地図



西軽井沢国際福音センター地図



西軽井沢国際福音センター
［電話］0267-32-6400㈹
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33〒389-0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで約5分（1000円程度）徒歩約45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて3つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、
厳重にお守りください。